岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第735集

令和３年度発掘調査報告書

舘遺跡　椛沢Ⅱ遺跡　大谷地Ⅲ遺跡

ほか調査概報（８遺跡）

２０２２

（公財）岩手県文化振興事業団

令和３年度発掘調査報告書

序

本県には、旧石器時代をはじめとする１万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、令和３年度に当センターが発掘調査を実施した全遺跡の調査成果をまとめ、調査報告書及び調査概報として発刊するものです。令和３年度は、全県下で12遺跡、34,396㎡が調査され、縄文時代から近世までの遺構、遺物が検出されております。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査並びに報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました各事業者、地元教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

令和４年３月

公益財団法人岩手県文化振興事業団
理事長　高　橋　嘉　行

目　　次

令和３年度発掘調査の概要 …… 1

Ⅰ　発掘調査報告

（１）舘遺跡（奥州市）…… 5
（２）桧沢Ⅱ遺跡（八幡平市）…… 25
（３）大谷地Ⅲ遺跡（花巻市）…… 51

Ⅱ　発掘調査概報

（４）力持遺跡（普代村）…… 59
（５）サンニヤⅢ遺跡（洋野町）…… 60
（６）間野村・境遺跡（紫波町）…… 61
（７）中林下遺跡（奥州市）…… 62
（８）明神下遺跡（奥州市）…… 63
（９）平清水Ⅰ・平清水Ⅱ遺跡（野田村）…… 64
（10）中平遺跡（野田村）…… 65
（11）大谷地Ⅲ遺跡（花巻市）…… 66

報告書抄録

舘遺跡（奥州市）…… 67
桧沢Ⅱ遺跡（八幡平市）…… 68
大谷地Ⅲ遺跡（花巻市）…… 69

令和３年度発掘調査の概要

令和３年度の発掘調査は、当初計画で11遺跡・面積34,943㎡で開始した。新規追加２遺跡（大谷地Ⅲ遺跡の別事業分、サンニヤⅢ遺跡）があり、最終的には11件、12遺跡・面積34,396㎡の調査を行った。前年度実績の８遺跡・面積58,075㎡と比較し、遺跡数では４件の増、調査面積は４割減となっている。本年度は北上盆地のほか、沿岸北部に多く、３市２町２村で実施した。内訳は、道路建設５遺跡、農業基盤整備４遺跡、産業廃棄物処理施設整備１遺跡、市町村からの受託２遺跡となっている。

縄文時代では、野田村中平遺跡、平清水Ⅱ遺跡で前期、普代村力持遺跡で中期、八幡平市桂沢Ⅱ遺跡で後期の集落跡を調査した。中平遺跡は竪穴住居26棟、陥し穴状遺構等37基を検出したが、土器などの遺物が極端に少ないことが注目される。力持遺跡では調査面積は少ないものの、住居、貯蔵穴など夥しい遺構の重複が見られた。また、中平遺跡、平清水Ⅱ遺跡、洋野町サンニヤⅢ遺跡、花巻市大谷地Ⅲ遺跡では溝状や土坑状の陥し穴状遺構が見つかっている。

大谷地Ⅲ遺跡は、奈良時代の集落跡でもある。環状の溝によって区画された内側に、大型の竪穴住居、住居状遺構が配されている。また、焼成遺構が18基検出され、盛んに土器生産が行われたと考えられる。竪穴住居、焼成遺構からは和賀を中心とした蝦夷の儀器とされる赤彩球胴甕が出土した。

今年度は平安時代の遺跡を多く調査している。奥州市胆沢若柳の明神下遺跡は、胆沢扇状地北端の胆沢川沿いに位置し、９世紀後半から10世紀前半の大規模集落である。24棟の竪穴住居を検出し、昨年度調査と併せると90棟を超える。竪穴住居の中には工房とみられるものもあり、床面から炉の跡を検出したほか、鉄滓が出土している。刀子や鉄鏃、紡錘車など鉄製品も多く、２か年合わせて180点を超える出土量である。小型の掘立柱建物も15棟を検出した。本遺跡からは緑釉陶器のほか昨年度は石帯８点がまとまって出土しており、胆沢城の関与する重要な集落であったと思われる。

奥州市水沢真城の中林下遺跡では、今年度19棟の掘立柱建物が確認された。昨年度調査分を含めると32棟である。建物の規模は２間×２間、３間×２間の小規模なものが多いが、５間×３間の大型の建物も検出している。柱穴は一辺0.6～1.5mの方形を呈しており、柱材や礎板が残存しているものがある。建物を建てるため地形の低い部分を埋めるように整地し、平坦地を造成していることが判明した。本遺跡は何らかの官衙に関連する遺跡と推定される。

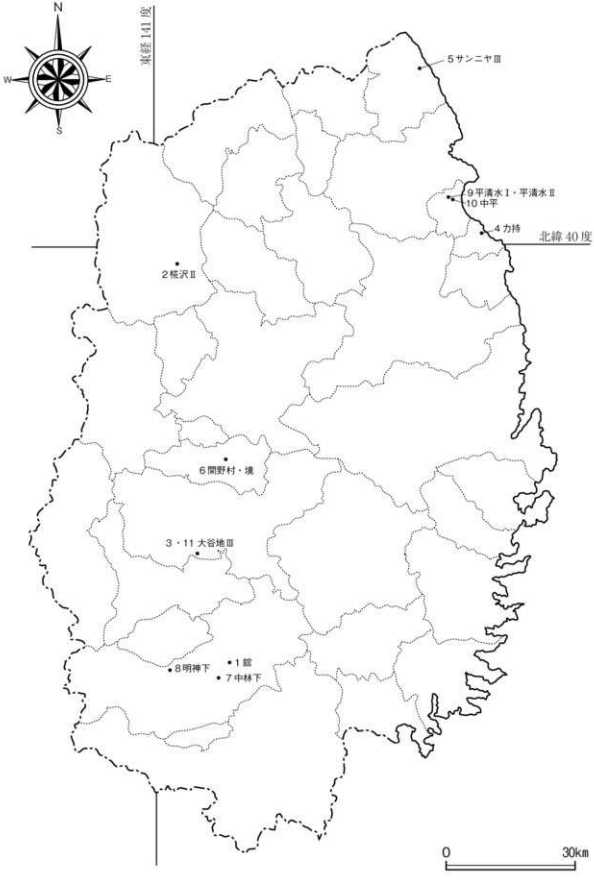
紫波町境遺跡は、９世紀代の集落で、北上川左岸の自然堤防上に位置する。竪穴住居２棟、焼成遺構２基のほか溝を検出している。

野田村中平遺跡は「野田竪穴住居跡群」として知られる県史跡の北東側に位置しており、昭和40年に岩手大学の草間俊一教授により住居と思われる窪みが180か所以上確認されている。今年度その一部を調査し、古代の竪穴住居24棟（うち確認調査区13棟）、土坑５基を検出した。完掘した11棟は平安時代の住居である。本遺跡は来年度も継続して調査する予定である。

中世では、奥州市中林下遺跡で戦国時代の居館跡が２か所検出された。昨年度調査で二重の堀に囲まれた一辺50mほどの空間が検出されていたが、今年度は堀の内側の精査を行い、二重の堀の間の土塁、門、通路の側溝、掘立柱建物の夥しい柱穴などを確認した。今年度はさらに50m南西で、ほぼ同程度の規模の居館跡を確認した。堀は二重ではないものの、堀の中の水をせき止める施設や屋敷地内に池を配することなど共通点が多い。

今年度は、創設以来最も少ない調査面積で、遺構数、遺物数も少なかったが、奈良、平安時代の遺跡において地方支配に関する成果が得られた。

（調査課長　金子佐知子）



報告遺跡位置図　数字は発掘調査報告・概報番号と共通

Ⅰ　発掘調査報告

凡　例

・本書で記載されているコンテナの大きさは内寸で下記のとおりである。

大コンテナ：42×32×30㎝

中コンテナ：42×32×20㎝

小コンテナ：42×32×10㎝

・本書では、遺構名称を簡素化し、遺構名称末尾に付す「跡」を省略する。

（例）竪穴住居跡→竪穴住居、掘立柱建物跡→掘立柱建物、溝跡→溝

（1）舘遺跡

所　在　地	奥州市水沢真城字舘地内	**遺跡コード・略号**	NE37-0010・TE-21
委　託　者	国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所	**調査対象面積**	1,000㎡
事　業　名	一般国道４号水沢東バイパス	**調査終了面積**	1,000㎡
発掘調査期間	令和３年８月２日～９月27日	**調査担当者**	溜 浩二郎・阿部勝則

1　調査に至る経過

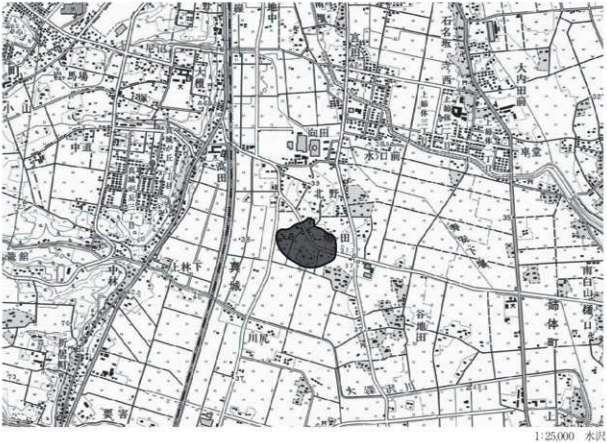
舘遺跡は、一般国道４号水沢東バイパス事業の事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

水沢東バイパスは、奥州市水沢の国道４号の交通混雑解消と交通安全の確保、沿道環境の改善を図るとともに、東北縦貫自動車道や東北新幹線水沢江刺駅とのアクセス向上等を目的として事業を進めているものである。

当該遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、令和元年９月19日付け国東整岩二工第26号により、岩手河川国道事務所長から岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課総括課長あてに試掘調査を依頼し、令和元年10月16日～18日に試掘調査を行い、令和元年11月15日付け教生第1017号により、工事に先立って発掘調査が必要と回答がなされたものである。

その結果を踏まえて、岩手県教育委員会と協議を行い、令和３年７月13日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなったものである。

（国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所）



第１図　遺跡位置図

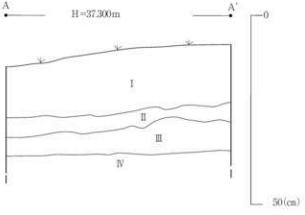
2　遺跡の位置と立地（第３図）

舘遺跡は、奥州市水沢真城字舘地内に所在し、JR 東日本東北本線陸中折居駅から北東に約1.9㎞の位置にある。遺跡は胆沢扇状地東端部の水沢段丘高位面上に所在し、標高は36～37ｍを測る。調査前の現況は畑地・水田および宅地跡である。

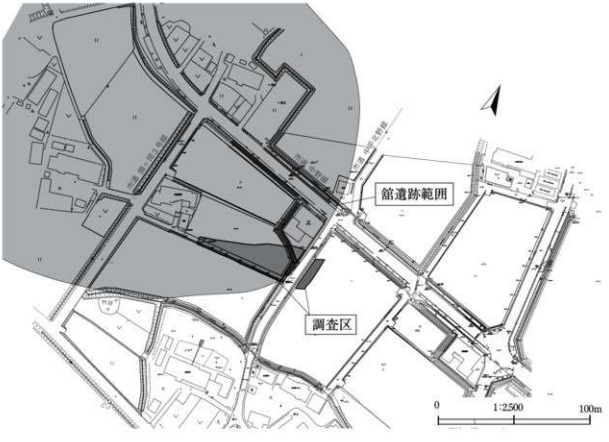
3　基本層序（第２図）

基本土層は調査区内で堆積状況が良好に観察された調査区西側壁面で観察を行い、Ⅰ～Ⅳ層に分層されることを確認した。西側の一部を除き、後世の造成工事による影響で、本来遺構・遺物が含まれていると推測されるⅢ層は大きく掘削されている状況であった。

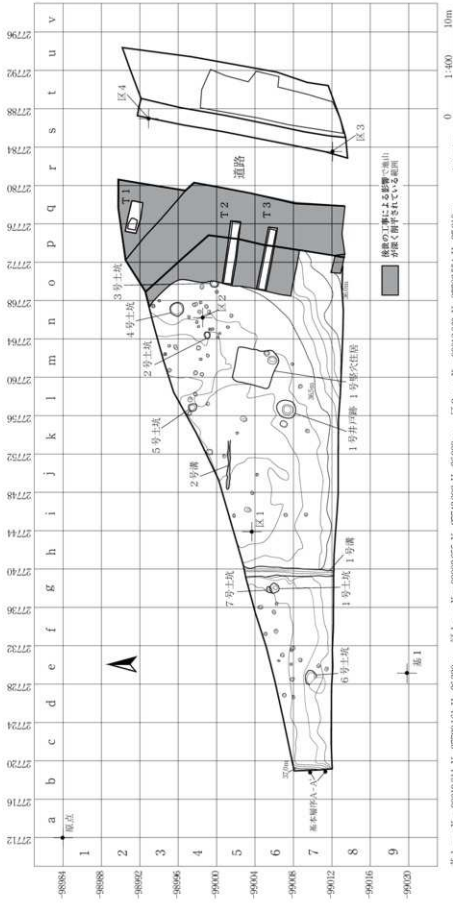
Ⅰ層：10YR2/3 黒褐色シルト 粘性・しまり中 現表土 層厚約20～30㎝
Ⅱ層：10YR2/2 黒褐色シルト 粘性・しまり中 旧耕作土
Ⅲ層：10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 粘性・しまり中 黄褐色シルト（10YR5/6）10～15％含む 遺構検出面
Ⅳ層：10YR5/6 黄褐色粘土質シルト 粘性中 しまり強 地山



第２図　基本層序



第３図　調査区と周辺地形図


a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t u v
27112 27116 27120 27124 27128 27132 27136 27140 27144 27148 27152 27156 27160 27164 27168 27172 27176 27180 27184 27188 27192 27196
-98984 -98988 -98992 -98996 -99000 -99004 -99008 -99012 -99016 -99020
1 2 3 4 5 6 7 8 9
原点
3号土坑
4号土坑
2号土坑
5号土坑
2号溝
7号土坑
6号土坑
1号土坑
1号溝
1号井戸跡
1号巻穴住居
道路
T1
T2
T3
区1
区2
区3
区4
基1
基2
依頼の工事による影響範囲が深く掘平されている範囲
基1・・X=-99019811 Y=27729161 H=36.330m
基2・・X=-98996572 Y=27653247 H=36.222m
（基2は長崎県埋蔵文化財センター設置）
区1・・X=-99003653 Y=27743892 H=36.909m
区2・・X=-98998546 Y=27706220 H=36.746m
区3・・X=-99012069 Y=27783554 H=37.210m
区4・・X=-98992302 Y=27786984 H=37.321m
1G=4m
0 1:400 10m

第４図　遺構配置図

4　調査の概要

調査に先立って行われた岩手県教育委員会の試掘トレンチ箇所を中心に人力によるトレンチを調査区全体に設置し、遺構検出面までの深さと土層の堆積状況を確認した。その後、遺構検出面まで重機で掘削→人力による検出・精査・実測の順で作業を行った。

また、本来調査区に含まれていた調査区東側の県道下については、道路の東西両脇の調査状況を踏まえた上で、調査に着手するかどうか判断することとしたが、調査の結果、道路下両脇に於いて文化財が確認されなかったことから、本道下の調査は実施していない。

（1）遺構

今回の調査で竪穴住居１棟、土坑７基、井戸跡１基、溝跡２条、柱穴状土坑62個を検出した。

１号竪穴住居（第５図、写真図版２・３）

調査区中央付近に位置し、Ⅳ層で検出した。削平を受けていたため遺構の残存状況は悪く、貼床での検出である。平面形状は長方形を呈し、長軸は北北東－南南西方向を向く。規模は南北4.41m、東西3.61mの範囲で貼床の掘方痕跡を確認した。貼床は黒褐色シルトと明黄褐色シルトの混合土で、厚さは最大で19cmを測る。床面施設は焼土を伴う土坑と柱穴各１基である。土坑の周辺や埋土に焼土が多く含まれていることからカマド関連の施設の可能性も考えられる。貼床および床面施設の埋土から土師器片が出土したことから遺構の時期は９世紀後半と推測される。

１号土坑（第５図、写真図版３）

調査区西側に位置し、表土下のⅣ層で検出した。７号土坑と重複し、これを切る。平面形状は円形で規模は開口部径95×93cm、底部径48×39cm、検出面から底面までの深さは32cmで、開口部から底面中心に向かって狭く、擂鉢状の形状を呈する。埋土は自然堆積で３層に分かれる。埋土から縄文土器と土師器片が少量出土した。時期は検出状況等から平安時代と推測される。

２号土坑（第５図、写真図版３）

調査区の北東側に位置し、調査に先立って行われた県教委による試掘によるトレンチ内のⅣ層で検出した。重複遺構はない。平面形状は円形で規模は開口部径71×61cm、底部径54×43cm、検出面から底面までの深さは12cmを測る。埋土は２層で、上～中位に焼土粒を少量含み、埋土から土師器片が少量出土している。時期は検出状況や出土遺物から平安時代と推測される。

３号土坑（第６図、写真図版４）

調査区北東側に位置し、表土下のⅣ層で検出した。重複遺構はないが、遺構の東側が削平され消失している。平面形状は楕円形と推測され、長軸径は開口部87cm、底部61cm、検出面から底面までの深さは19cmを測る。埋土は自然堆積で３層に分かれる。遺物が出土していないため、詳細時期は不明である。

４号土坑（第６図、写真図版４）

調査区の北東側に位置し、表土下のⅣ層で検出した。重複遺構はない。平面形状は円形で規模は開口部径1.43×1.28cm、底部径1.22×1.13cm、検出面から底面までの深さは51cmを測る。埋土は４層に分かれる。遺物は土師器の小片が１点出土したが、遺構の時期については埋土の状況から判断して近世以降と推測される。

５号土坑（第６図、写真図版４）

調査区中央部の北端に位置し、表土下のⅣ層で検出した。重複遺構はない。平面形状は円形で規模は開口部径88×78cm、底部径51×43cm、検出面から底面までの深さは15cmを測る。埋土は３層に分かれる。遺物が出土していないため、時期は不明である。

６号土坑（第６図、写真図版４）

調査区西側に位置し、表土下のⅣ層で検出した。重複遺構はないが、遺構の南側が撹乱の影響で消失している。平面形状は楕円形で規模は一部が失われているため不明である。検出面から底面までの深さは19cmを測る。埋土は２層に分かれ、黒褐色シルトを主体とした堆積である。遺物は埋土と南側の撹乱内から土師器が少量出土した。時期は出土遺物と埋土の状況から平安時代以降と推測される。

７号土坑（第６図、写真図版５）

調査区西側に位置し、表土下のⅣ層で検出した。１号土坑と重複し、これよりも古い。南側が１号土坑に切られ撹乱の影響で消失している。平面形状は楕円状で、規模は長軸径で開口部61cm、底部47cm、検出面から底面までの深さは18cmを測る。埋土は２層に分かれ、黒褐色シルトを主体とした堆積である。時期は１号土坑との重複関係から古代以前である。

１号井戸跡（第７図、写真図版５）

調査区の中央部に位置し、Ⅳ層で検出した。平面形状は開口部楕円形、底部円形で規模は開口部径211×187cm、底部径80×76cm、検出面から底面までの深さは109cmを測る。埋土は７層で、上位黒褐色シルト、中位にぶい黄褐色シルト、下位黄褐色粘土質シルトと砂層をそれぞれ主体とする土層が堆積している。遺構の時期は遺物出土から近世と推測される。

１号溝（第７図、写真図版５）

調査区西側に位置し、Ⅳ層で検出した。重複遺構はなく、遺構の南側は削平され消失し、北側は調査区外へと延びる。検出した溝は南北方向に延び、長さ9.72m、上端幅15～34cm、下端幅５～16cm、検出面から底面までの深さは最も残存する北側で最大34cmを測る。埋土は２層で明黄褐色シルトを含む黒褐色シルトを主体とした堆積で、埋土中より、土師器・陶器片が少量出土している。遺構の時期は近世以降と推測される。

２号溝（第７図、写真図版５）

調査区中央部の北側に位置し、Ⅳ層で検出した。重複遺構はなく、遺構の東側は削平され消失している。検出した溝は東西方向に延び、長さ5.11m、上端幅61～110cm、下端幅12～24cm、検出面から底面までの深さは８cmを測る。埋土は２層で上位が明黄褐色シルト、中～下位は黒褐色シルトを主体とした堆積である。出土遺物がないことから遺構の時期は不明である。

柱穴状土坑（第８・９図、写真図版６）

調査区全体で標高の高い北側を中心に62個検出した。調査区西側および中央部北側の４１～４ｎグリッド付近で顕著である。規模は開口部径26～76cmの範囲である。時期は出土遺物や検出状況から古代および近世以降のものが混在すると推測される。

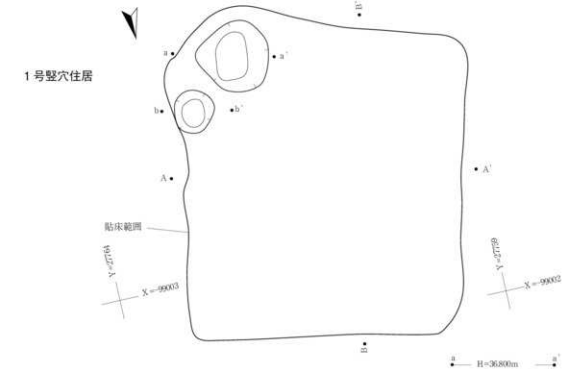
（２）出土遺物

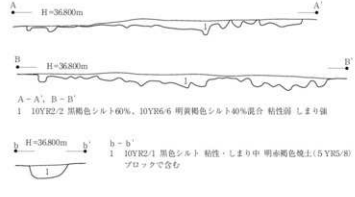
今回の調査で出土した土器は古代の土器3954.3ｇ、縄文土器42.8ｇ、他に陶磁器1418.3ｇ、金属遺物54.6ｇが出土した。図化・掲載したのは20点で内訳は土師器10点、須恵器１点、陶磁器７点、煙管１点、銭貨１点である。各遺物の特徴については観察表に記載した。

５　まとめ

調査の結果、古代・近世の遺構・遺物が見つかったことから、生活の場として利用されていたことが判明した。古代については遺物の出土状況から、集落の一部と推測されるが、後世の造成工事による影響で、遺構の大半が削平されている状況であった。

なお、館遺跡令和３年度調査に関わる報告はこれをもって全てとする。



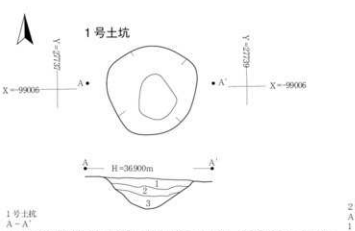


A－A'，B－B'
1　10YR2/2 黒褐色シルト60%，10YR6/6 明黄褐色シルト40%混合 粘性弱 しまり強

b－b'
1　10YR2/1 黒色シルト 粘性・しまり中 明赤褐色焼土(5YR5/8)ブロックで含む

a－a'
1　10YR2/3黒褐色シルト 粘性弱 しまり中 明赤褐色焼土粒(5YR5/8 径3～7mm) 1～2％含む
2　10YR2/3黒褐色シルト 粘性強 しまり中 明赤褐色焼土粒(5YR5/8 径7～10mm) 2％含む
3　10YR2/3黒褐色シルト 粘性・しまり弱 明赤褐色焼土粒(5YR5/8 径5～15mm) 5～7％含む
4　10YR2/3黒褐色シルト 粘性・しまり中 明赤褐色焼土粒(5YR5/8 径10～15mm) 7％含む

0　1:50　2m



1号土坑
A－A'
1　10YR2/2 黒褐色シルト 粘性強 しまり中 褐色シルト(焼土，7.5YR4/4)ブロックで2％，黄褐色シルト(10YR5/6)ブロックで1％含む
2　10YR2/1 黒色シルト 粘性強 しまり中 黄褐色シルト(10YR5/6)焼状に1％未満含む
3　10YR3/1 黒褐色シルト 粘性・しまり中 黄褐色シルト(10YR5/6)全体に1～2％含む

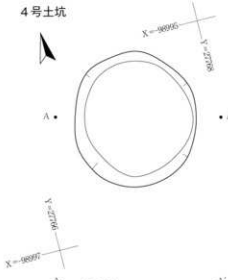
2号土坑
A－A'
1　10YR2/2 黒褐色シルト 粘性・しまり中 褐色シルト(10YR4/6)20～30％，赤褐色焼土粒(5YR4/8) 1％含む
2　10YR3/1 黒褐色シルト 粘性弱 しまり中 橙色シルト(7.5YR6/8) 5～7％含む

第5図　1号竪穴住居、1・2号土坑

3号土坑

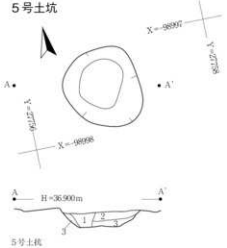
3号土坑
A－A'
1　10YR2/2 黒褐色シルト 粘性・しまり中 黄褐色シルト(10YR5/6) 5％含む
2　10YR2/2 黒褐色シルト 粘性・しまり中 黄褐色シルト(10YR5/6) 3％含む
3　10YR5/6 黄褐色シルト 粘性弱 しまり中 黒褐色シルト(10YR2/2)20％含む

4号土坑



4号土坑
A－A'
1　10YR4/1 褐灰色粘土40％、10YR6/6 明黄褐色粘土30％、10YR3/2 黒褐色シルト 30％混合 粘性強 しまり中
2　10YR2/2 黒褐色粘土質シルト 粘性・しまり中
3　10YR3/3 暗褐色シルト 粘性・しまり中 明黄褐色粘土(10YR6/6) 5～7％含む
4　10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性・しまり中

5号土坑

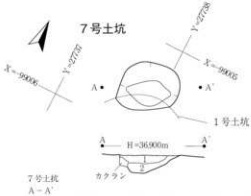


5号土坑
A－A'
1　10YR2/3 黒褐色シルト 粘性・しまり弱
2　10YR2/3 黒褐色シルト 粘性弱 しまり中 褐色シルト(10YR4/6)20～30％混じる
3　10YR3/2 黒褐色シルト 粘性弱 しまり中 褐色シルト 褐色シルト(10YR4/6 径3～5mm) 1～2％含む

6号土坑

6号土坑
A－A'
1　10YR2/2 黒褐色シルト 粘性・しまり強 明黄褐色シルト(10YR7/6) ブロック状に1～2％含む
2　10YR3/2 黒褐色シルト 粘性弱 しまり中 明黄褐色シルト(10YR6/6) 20～30％含む

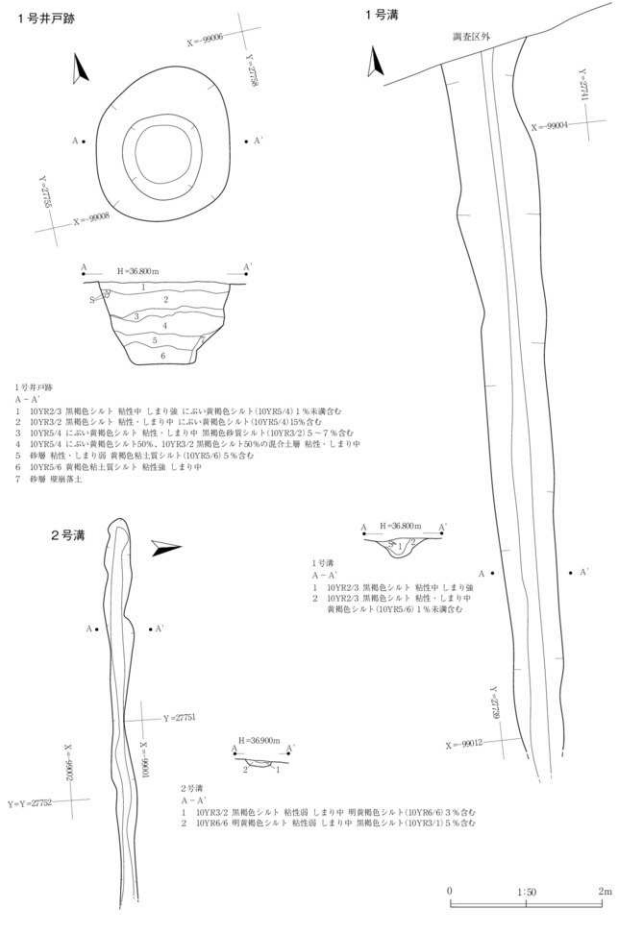
7号土坑



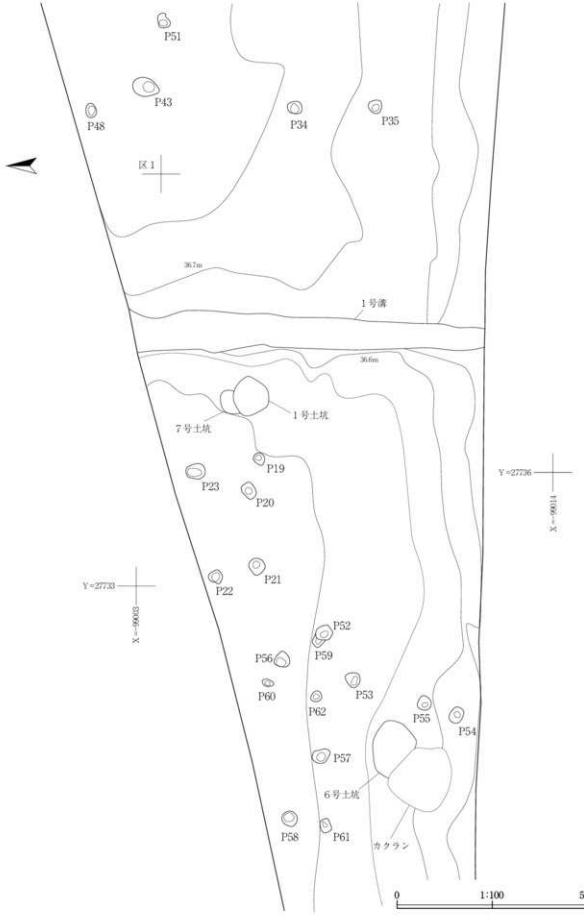
7号土坑
A－A'
1　10YR2/3 黒褐色シルト 粘性・しまり中 明黄褐色シルト(10YR6/6) 10～15％、赤褐色焼土(5YR4/8)ブロックで1％含む
2　10YR2/3 黒褐色シルト 粘性・しまり中 明黄褐色シルト(10YR6/6) 30～40％混じる

0　1:40　2m

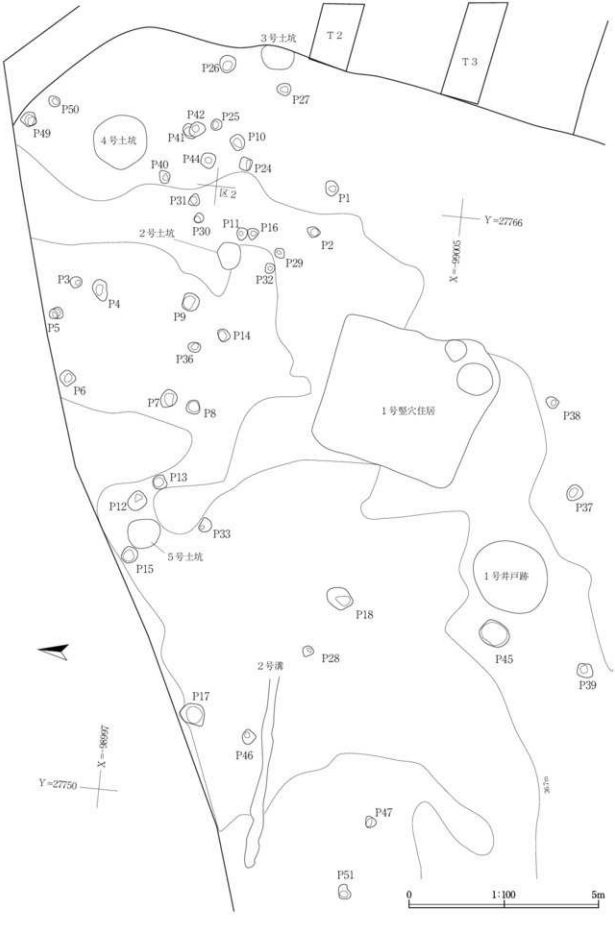
第6図　3～7号土坑



第７図　１号井戸跡、１・２号溝



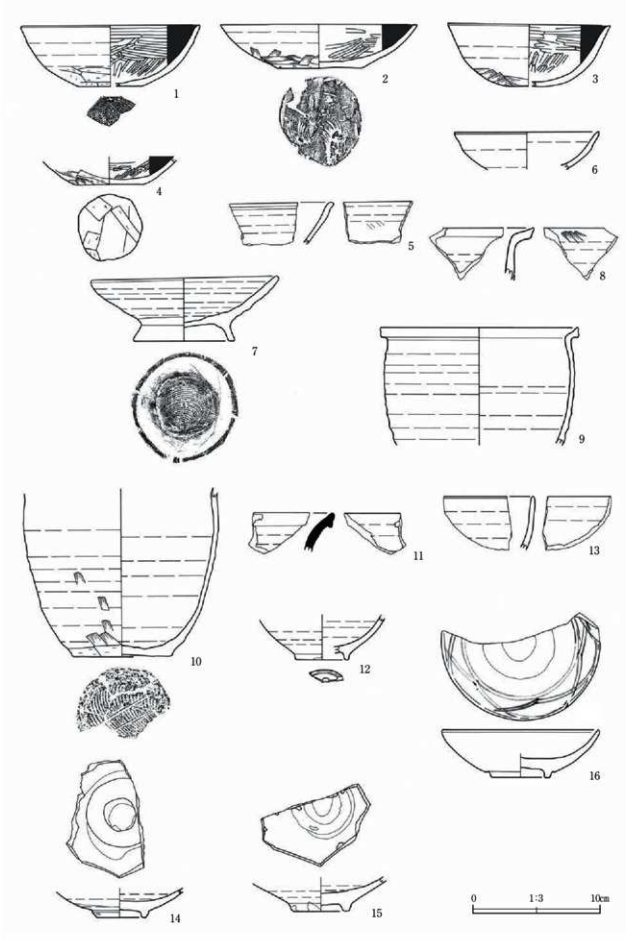
第８図　柱穴状土坑配置図１



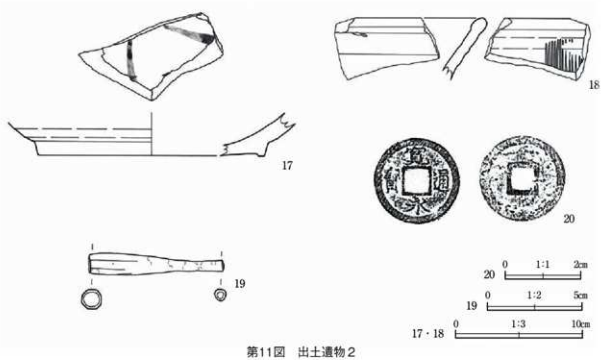
第９図　柱穴状土坑配置図２

表1　柱穴状土坑一覧

PNo.	地点	径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	備考
1	5 n	40 × 33	28	36.33	
2	5 n	35 × 27	29	36.34	
3	3 m	31 × 29	59	36.16	
4	3 m	57 × 38	46	36.29	
5	3 m	35 × 30	30	36.37	
6	3 m	36 × 36	40	36.49	
7	4 m	49 × 40	27	36.50	
8	4 m	38 × 37	31	36.44	
9	4 m	46 × 43	34	36.39	
10	4 n	40 × 35	31	36.24	
11	4 n	32 × 26	51	36.12	
12	4 l	50 × 43	71	36.08	
13	4 l	35 × 35	36	36.47	
14	4 m	34 × 27	43	36.30	
15	4 l	43 × 40	30	36.46	
16	4 n	30 × 28	51	36.12	
17	4 j、4 k	68 × 58	51	36.32	
18	5 k	71 × 55	28	36.42	
19	6 g	33 × 28	29	36.54	
20	6 f	43 × 33	53	36.31	
21	6 f	43 × 39	47	36.40	
22	6 f	35 × 34	45	36.45	
23	6 f、6 g	50 × 41	51	36.31	
24	4 n	33 × 32	34	36.25	
25	4 n	29 × 28	44	36.13	
26	4 o	46 × 42	34	36.22	
27	4 o、5 o	37 × 32	39	36.20	
28	5 k	28 × 28	26	36.43	
29	5 n	30 × 26	24	36.45	
30	4 n	26 × 24	19	36.36	
31	4 n	31 × 27	24	36.37	
32	5 n	27 × 26	19	36.47	
33	4 l	36 × 35	47	36.24	
34	6 i	37 × 33	31	36.43	
35	7 i	35 × 35	49	36.19	
36	4 m	32 × 25	48	36.18	
37	7 l	44 × 38	22	36.30	
38	6 m、7 m	32 × 27	39	36.12	
39	7 k	45 × 39	19	36.35	
40	4 n	36 × 28	36	36.17	
41	4 n	41 × －	33	36.21	P.42より古い
42	4 n	34 × －	36	36.18	P.41より新しい
43	5 i	71 × 49	27	36.48	
44	4 n	39 × 37	28	36.29	
45	6 k	76 × 65	21	36.45	
46	5 j	34 × 32	44	36.22	
47	6 j	30 × 28	42	36.38	
48	5 i	36 × 27	22	36.63	
49	3 m	37 × 35	37	36.17	
50	3 n、3 o	32 × 27	28	36.27	
51	5 i、5 j	38 × 30	32	36.37	
52	6 e、7 e	43 × 39	44	36.30	P.59より新しい
53	7 e	40 × 39	35	36.30	
54	7 e	43 × 34	28	36.30	
55	7 e	41 × 37	28	36.35	
56	6 e	39 × 38	56	36.21	
57	6 e、7 e	49 × 35	21	36.54	
58	6 d	41 × 38	43	36.38	
59	6 e	(19)× 28	24	36.47	P.52より古い
60	6 e	30 × 18	27	36.50	
61	6 d、7 d	34 × 27	34	36.39	
62	6 e	30 × 26	20	36.50	



第10図　出土遺物１



第11図　出土遺物２

表２　土師器・須恵器観察表

No	出土地点・層位	種類	器種	部位	器面調整等			計測値（cm）			備考
					外面	内面	底部外面	口径	器高	底径	
1	P 41埋土	土師器	坏	口縁～底部	ロクロナデ、下部ケズリ	黒色処理、ミガキ	回転糸切	(14.1)	4.8	(5.0)	
2	5 m 撹乱内	土師器	坏	口縁部	ロクロナデ→ナデ・ケズリ	黒色処理、ミガキ	回転糸切→再調整	(15.5)	3.5	6.8	
3	5 m 撹乱内	土師器	坏	口縁～底部	ロクロナデ→下部ナデ	黒色処理、ミガキ	摩滅	(12.4)	4.9	(3.6)	
4	1 号竪穴住居内土坑埋土	土師器	坏	体部下～底部	ロクロナデ、ナデ、ケズリ	黒色処理、ミガキ	ケズリ、一部摩滅	-	<22>	5.2	
5	1 号竪穴住居内土坑埋土	土師器	坏	口縁部	ロクロナデ	ミガキ		-	-	-	
6	4 k 撹乱内	土師器	坏	口縁～体部	ロクロナデ	ロクロナデ		(11.4)	<2.9>	-	
7	5 l 撹乱内	土師器	高台坏	口縁～底部	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	14.8	5.1	8.0	
8	1 号竪穴住居内土坑埋土	土師器	甕	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラナデ		-	-	-	
9	1 号竪穴住居内土坑・P 1埋土	土師器	甕	口縁～体部	ロクロナデ	ロクロナデ		(15.5)	<9.4>	-	
10	1 号竪穴住居内土坑・P 1埋土、陥床土	土師器	甕	体部～底部	ロクロナデ、下半ナデ、ケズリ	ロクロナデ	回転糸切	-	<13.3>	(7.9)	
11	8 o	須恵器	甕	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ		-	-	-	

表３　陶磁器観察表

No	出土地点・層位	種類	器種	部位	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	産地	時期	備考
12	6 h 撹乱内	陶器	碗	体～底部	－	<3.6>	(4.2)	大堀相馬	18～19C	
13	P 41埋土	陶器	碗	口縁部	－	－	－	唐津	18C	
14	1 号溝埋土	磁器	皿	体～底部	－	<2.3>	3.8	肥前	18C	
15	1 号溝埋土	磁器	皿	体～底部	－	<2.8>	4.4	肥前	18C	
16	5 l 撹乱内	磁器	皿	口縁～底部	12.5	3.8	(4.6)	肥前	17C後半～18C前半	
17	5 p トレンチ内	陶器	鉢（擂鉢）	体～底部	－	<3.4>	(17.8)	美濃	17C	
18	8 o	陶器	徳利	口縁部	－	－	－	瀬戸・美濃	18前半	

表４　金属遺物観察表

No	出土地点・層位	素材	器種	長さ（cm）	口元径（外）/（内）mm	小口径（外）/（内）mm	重量（g）	備考
19	1 号井戸跡埋土	銅	煙管（雁首）	7.1	6.39 / **3.92**	9.86 / 7.90	14.6	

表５　銭貨観察表

No	出土地点・層位	素材	銭名	銭径（縦）/（横）mm	外縁内径（縦）/（横）mm	銭厚（mm）	量目（g）	備考
20	5 n 撹土内	銅	寛永通宝	23.37 / 23.19	18.56 / 18.59	1.00～1.14	2.67	

<>残存値、（ ）推定値

遺跡遠景・W→

調査区全景・上が北

写真図版１　航空写真、調査区

基本層序・E→

調査前風景・E→

調査区完掘（道路西側）・NE→

調査区完掘（道路東側）・S→

1号竪穴住居検出・S→

1号竪穴住居完掘・N→

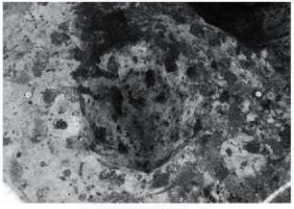
1号竪穴住居貼床断面・N→

1号竪穴住居貼床断面・W→

写真図版２　基本層序、調査区、検出遺構１

1号竪穴住居内土坑完掘・N→

1号竪穴住居内土坑断面・N→

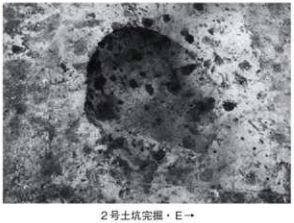


1号竪穴住居内柱穴完掘・N→

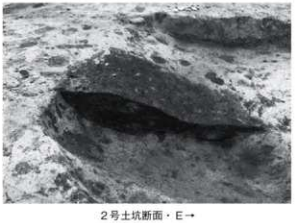
1号竪穴住居内柱穴断面・N→

1号土坑完掘・S→

1号土坑断面・S→



2号土坑完掘・E→



2号土坑断面・E→

写真図版３　検出遺構２

３号土坑完掘・Ｓ→

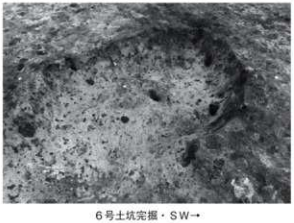
３号土坑断面・Ｓ→

４号土坑完掘・Ｓ→

４号土坑断面・Ｓ→

５号土坑完掘・ＳＷ→

５号土坑断面・Ｓ→



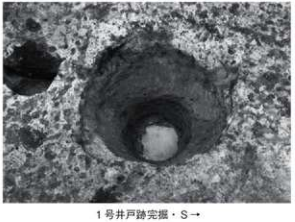
６号土坑完掘・ＳＷ→

６号土坑断面・ＳＷ→

写真図版４　検出遺構３

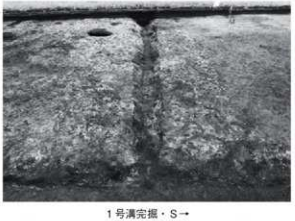
7号土坑完掘・S→

7号土坑断面・S→

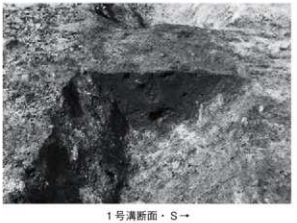


1号井戸跡完掘・S→

1号井戸跡断面・S→



1号溝完掘・S→



1号溝断面・S→

2号溝完掘・E→

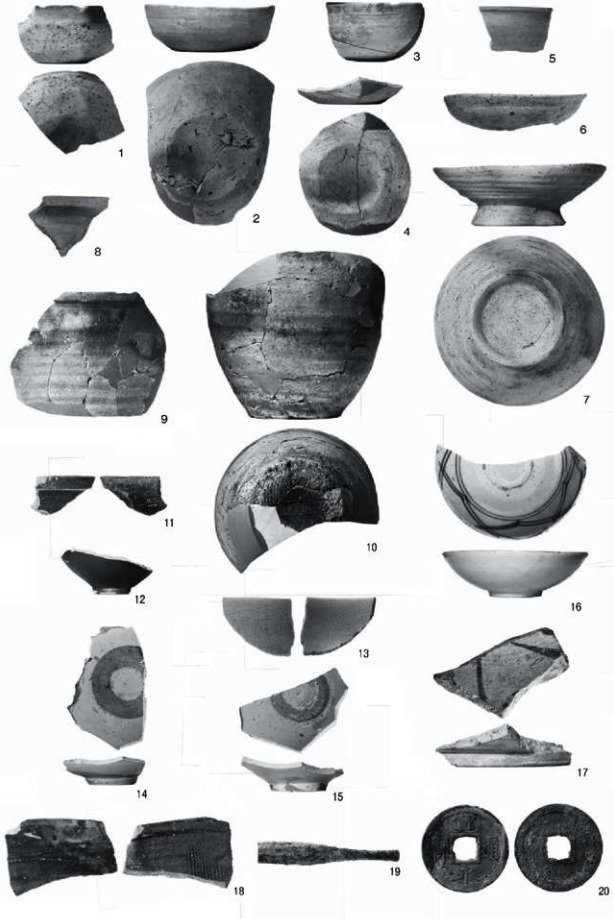
2号溝断面・E→

写真図版5　検出遺構4

柱穴群１（調査区東側）完掘・Ｓ→

柱穴群２（調査区西側）完掘・Ｓ→

写真図版６　検出遺構５



写真図版７　出土遺物

（2）椛沢（かばさわ）Ⅱ遺跡

所　在　地	八幡平市平舘第２地割418番地	**遺跡コード・略号**	KE04-2323・KBⅡ-21
委　託　者	（一財）クリーンいわて事業団	**調査対象面積**	900㎡
事　業　名	公共関与型産業廃棄物最終処分場整備事業	**調査終了面積**	900㎡
発掘調査期間	令和３年10月１日～10月29日	**調 査 担 当 者**	川又 晋・杉沢昭太郎

１　調査に至る経過

椛沢Ⅱ遺跡は、公共関与型産業廃棄物最終処分場土木施設建設工事の施工に伴って、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することになったものである。

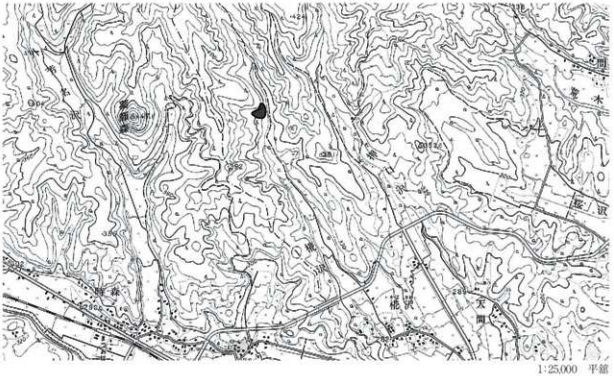
本最終処分場は、県内で実質的に唯一の管理型産業廃棄物最終処分場である「いわてクリーンセンター（奥州市）」の後継として、県からの要請を受け当事業団（実施主体）が八幡平市平舘地区に整備を進めているものである。

椛沢Ⅱ遺跡は、新規の遺跡である。当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、県環境生活部廃棄物特別対策室（当時）から県教育委員会に対し、平成29年７月19日付廃第103号「埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により試掘調査の依頼があった。

依頼を受けた県教育委員会は平成29年８月28日～９月１日に試掘調査を実施し、工事に着手するには椛沢Ⅱ遺跡の発掘調査が必要となる旨を平成29年９月27日付教生第855号「埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により回答した。

その結果を踏まえて当事業団は県教育委員会と協議を行い、令和３年６月30日付けで当事業団理事長と公益財団法人岩手県文化振興事業団理事長との間で委託契約を締結し、椛沢Ⅱ遺跡の発掘調査を実施することとなった。

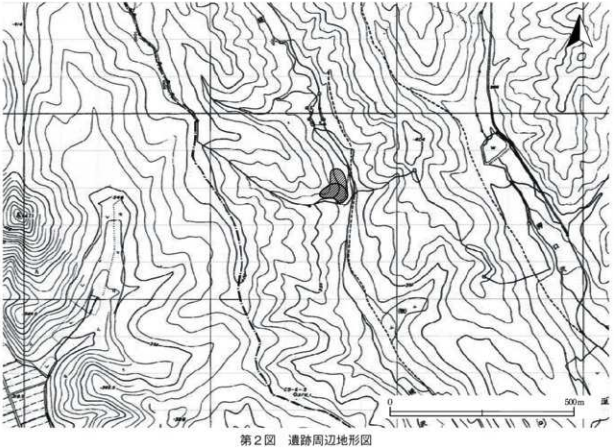
（一般社団法人クリーンいわて事業団）



第１図　遺跡位置図

2　遺跡の位置と立地（第２・４図）

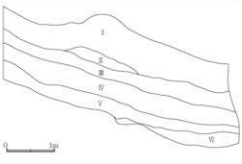
遺跡は、八幡平市平舘第２地割418番地ほかに所在し、JR東日本花輪線松尾八幡平駅から北東に約1.8kmの位置にある。御月山（954m）や荒木田山（899m）山塊を源とする桃沢の上流域にあたり、この桃沢は南流して赤川と合流し、更に松川となる（松川は北上川の支流）。遺跡は幅の狭い谷部に形成された小規模な緩斜面（標高345～340m）に立地する。また桃沢にかつて流れ込んでいた沢跡が調査区南側から見つかっている。調査前の現況は山林で、林道によって遺跡の一部は削平されていた。過去に発掘調査されたことはない。



第２図　遺跡周辺地形図

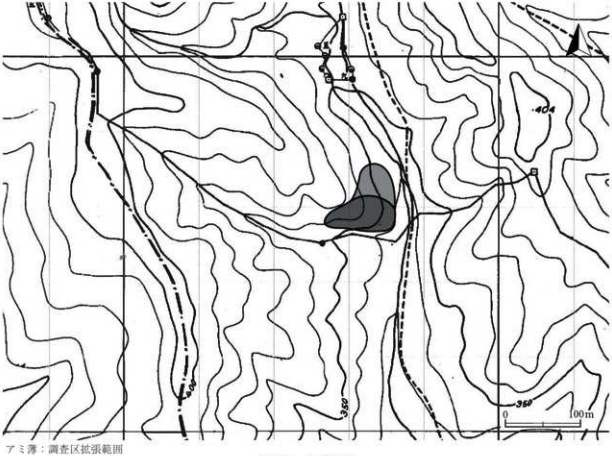
3　基本層序（第３図、写真図版８）

基本土層は調査区内で土層が良好に残存する調査区南西側緩斜面部で観察記録を取った。Ⅰ～Ⅵ層以上に分層されるが、調査区の南西部以外は林道によりⅥ層まで削平を受けている部分が多かった。



Ⅰ　10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性強　締りやや弱
Ⅱ　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中　締り中　砂10%、浮石（径2mm）7%混入
Ⅲ　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中、締り中　10YR5/4　にぶい黄褐色テフラ（砂質様　粘性弱、締り中）10%、砂5%混入
Ⅳ　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中　締りやや弱　浮石（径1-2mm）2%混入
Ⅴ　10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性やや強　締り中　浮石（径1-2mm）1%混入
Ⅵ　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中　締り中　浮石（径3-5mm）7%混入

第３図　基本土層



アミ薄：調査区拡張範囲

第４図　遺跡位置

Ⅳ層が遺物包含層（縄文時代）である。その直上にあたるⅢ層ににはにぶい黄橙～浅黄橙色の火山灰がみられた。この火山灰は流れ溜まったものではなく、ほぼ降灰状態を保っていると判断した。Ⅳ～Ⅵ層には径３～30cm程の亜角礫が不規則に含まれるが、人為的に持ち込まれたものではない。

４　調査の概要

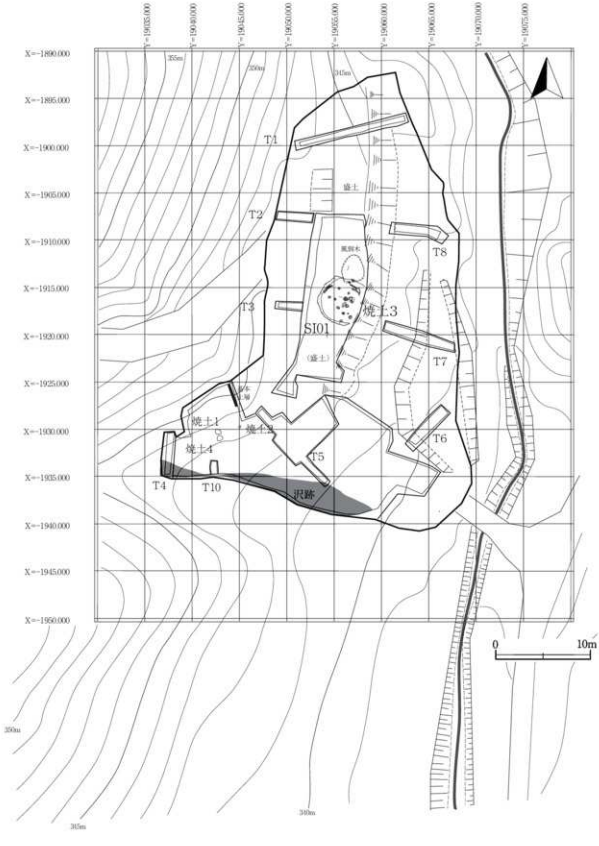
調査区全域に人力による試掘トレンチを10数箇所設置し、遺構・遺物の有無、遺構検出面までの深さと土層の堆積状況を確認した。その後、遺構・遺物が確認されたところと、林道などで削平を受けていないところを遺構検出面まで重機で掘削し、人力による検出・精査・実測の順で作業を行った。調査区北側から西側にある林道は、地山まで深く掘削しており、その際に出た土は道の脇に盛土されていた。こうしたところは試掘トレンチのみの調査とした。

（１）遺構

検出遺構は竪穴住居１棟、焼土４基である。いずれも縄文時代に帰属する。

SI01竪穴住居（第６図、写真図版３～５、８）

〔位置・検出状況〕調査区のほぼ中央、斜面部から緩斜面へと地形の変わるところに位置している。試掘調査中に火山灰（３層）が他よりも密に見られたこと、土器片が出土したことから、何らかの遺構の可能性があるとの想定で精査を進めることとした。〔平面形・規模〕東側の一部が林道の掘削に


Y=-19035.000
Y=-19040.000
Y=-19045.000
Y=-19050.000
Y=-19055.000
Y=-19060.000
Y=-19065.000
Y=-19070.000
Y=-19075.000
X=-1890.000
X=-1895.000
X=-1900.000
X=-1905.000
X=-1910.000
X=-1915.000
X=-1920.000
X=-1925.000
X=-1930.000
X=-1935.000
X=-1940.000
X=-1945.000
X=-1950.000
T1
T2
T3
T4
T5
T6
T7
T8
T10
SI01
焼土3
焼土1
焼土2
焼土4
盛土
風倒木
沢跡
0
10m

第５図　遺構配置図

よって、北側は風倒木によって失われているが平面形は概ね円形であったといえる。遺構検出面での規模は南北方向が5.3m、東西方向は4.7m以上、最も深い西壁で1.2m、床面積は残存部分で69.4㎡を測る。〔埋土〕偶然に表土直下から断面図を作成することができたので13層に分けて記録しているが、遺構に関係するのは６～13層である。12層（炉）以外は自然堆積である。３層の火山灰は本遺構がほとんど埋まり切った上に乗っている。〔壁・床面〕残存する南壁、西壁共に床面から垂直気味に立ち上がっている。床面は地山面を床面としており平坦である。貼床にはなっていなかった。柱穴状土坑が13基見つかっているが、あまり深くないものもある。壁に沿って溝がみられるが、深いところで12㎝程で、ほとんどは10㎝未満であった。〔建て替え〕溝が壁に沿って二重若しくはそれ以上に巡っているようにもみえる。一方､炉には造り替えの痕跡が無かった。〔炉〕床面のほぼ中央に地床炉があった。平面規模は54㎝×49㎝､床面から７㎝の深さまで被熱変色していた。石囲い炉の可能性も考えたが、そうした痕跡は確認されなかった。〔出土遺物〕床面及び埋土から出土した土器のほとんどを掲載した（１～15）。石器類は注意して精査したが出土しなかった。床面･床面直上出土は１～４･９である。〔時期〕出土した土器は縄文時代中期・後期・晩期のものがあったが、床面・床面直上から出土した後期後葉の土器１～４が本遺構の機能していた時期のものとみられる。

焼土１（第７図、写真図版６）

〔位置・検出状況〕調査区南西部の緩斜面部に位置する。Ⅴ～Ⅵ層面において、不整円形の焼土生成範囲として確認された。〔規模・形状〕平面形は67㎝×49㎝の不整な円形を呈する。赤変深度は２㎝程である。上面に顕著な硬化は見られない。〔重複・関連遺構〕重複する遺構はないが、すぐ近くからは焼土２と焼土４が見つかっている。〔遺構の時期〕Ⅴ～Ⅵ層からは縄文土器が出土していることから、本遺構も縄文時代のものと考えられる。

焼土２（第７図、写真図版６）

〔位置・検出状況〕調査区南西部で緩斜面部に位置している。Ⅴ～Ⅵ層面において、不整楕円形の焼土生成範囲として確認された。〔規模・形状〕平面形は24㎝×14㎝の不整な楕円形を呈する。赤変深度は６㎝程である。上面に顕著な硬化は見られない。〔重複・関連遺構〕重複する遺構はないが、すぐ近くからは焼土１と焼土４が検出されている。〔遺構の時期〕Ⅴ～Ⅵ層からは縄文土器が出土しており、本遺構も縄文時代の帰属としている。

焼土３（第７図、写真図版６）

〔位置・検出状況〕調査区のほぼ中央にあるSI01竪穴住居の埋土最上位に位置し、不整円形の不明瞭な焼土範囲として確認された。〔規模・形状〕平面規模は84㎝×23㎝以上となる。赤変深度は20㎝程である。〔重複・関連遺構〕SI01竪穴住居が廃絶し、ほぼ埋まった段階で火を焚いた場所である。この焼土の直上を火山灰が覆っている。〔遺構の時期〕SI01竪穴住居が縄文時代後期後葉とみられることから、本遺構は縄文時代後期後葉及びそれ以降となるが、古代より新しくはならない。

焼土４（第７図、写真図版６）

〔位置・検出状況〕調査区南西部の緩斜面部に位置する。Ⅴ～Ⅵ層面において、円形の焼土範囲として見つかっている。〔規模･形状〕平面形は65㎝×49㎝の円形をしていた。焼土の厚さは５㎝程である。上面に顕著な硬化は見られない。〔重複・関連遺構〕重複する遺構はないが、すぐ近くからは焼土１と焼土２が検出されている。〔遺構の時期〕Ⅴ～Ⅵ層からは縄文土器が出土していることから、本遺構も縄文時代の可能性が高い。

（2）出土遺物（第８・９図、写真図版９・10）

今回の調査では縄文土器5,390.8ｇ（中コンテナ１箱弱）、土製品２点が出土した。主な出土地としては、調査区南側の緩斜面部に設定したT5トレンチとその周辺部を合わせて2,572.8ｇ、SI01竪穴住居跡から2,009.1ｇ、盛土下エリア（※SI01竪穴住居跡の直上を含み、林道建設に伴い南北に細長く盛土されていた範囲）として取り上げた部分で473.9ｇである。時期は縄文時代中期～晩期まで確認され、主体は後期後葉である。層位に関わる特記事項として、基本層序Ⅲ層と命名したにぶい黄橙色の砂質様テフラが検出されている。SI01竪穴住居跡埋土３層と命名した土層や、調査区南側で堆積が確認されている。土器の出土層位はこのテフラ層より下位で、基本層序Ⅳ層やⅤ層に相当する土層が本来の帰属層と捉えられる。以下には時期毎に特徴などを記載する。

[中期] 中期末葉に相当するものが一定量出土した。出土地はSI01竪穴住居（※住居の時期は後期後葉）を中心にその北側の木根カクラン層やT5トレンチである。これらの文様施文順をみると２種類に大別され、①№６・７や８・11・12は縄文原体の施文→沈線モチーフ→縄文部の一部磨消（磨消縄文）、②同一個体である№10・17・18は沈線モチーフ→縄文原体の施文（充填縄文）をみる。用いられる縄文原体の種類は、LR以外にRRL（直前段反撚）と推定される特殊なものもある。回転方向は何れも縦回転である。また、複節RLRが縦回転に施文される№13についても当該期と推定される。土器型式としては、森幸彦氏の大木10b式（森：2008）、阿部昭典氏の大木10式中～新段階（阿部：2008）に相当しよう。

[後期] ①初頭と②後葉に大別され、後者が主体を占める。①前葉として№19が挙げられ、無節Ｌを斜回転→沈線モチーフ→磨消縄文が施される。上村式若しくは韮窪式に相当しようか。②後葉はSI01竪穴住居を中心に出土した。№３・４・５・20・21・22は、沈線モチーフ→LR・RL非結束羽状縄文→沈線引き直しの文様施文順をみることから、充填縄文が施される特徴が看取できる。その他として№２・22に貼り瘤の付加が認められる。また、№16に３条の櫛歯状工具による条線文が見られる。この条線文を施文する土器は八幡平市上斗内Ⅲ遺跡第Ⅸ群土器（岩手埋文：1984）に類似性が高い。特記事項として、№３の壺形土器の胴部は焼成後意図的に複数個所が穿孔されている。後葉と推定される土器は小林圭一氏に準拠すれば十腰内４式古段階（小林：2015）に相当すると捉えられよう。

[晩期] №15は羊歯状文を施文する台付き鉢で大洞BC式に相当する。出土層位はSI01竪穴住居５層で、上述のテフラ層（３層）より下位から出土している。同一個体と推定される№28・29は口縁部に４条の平行沈線、口唇部に連続する指頭圧痕文が見られる。晩期中葉～後葉の深鉢土器と判断される。

[土製品] ミニチュア土器（№30）と円盤状土製品（№31）が出土している。№30は表面に指頭による調整痕が明確に残り、やや粗い作りにある。№31はSI01竪穴住居の埋土下位出土で非結束羽状縄文が施文される。特徴や出土地などから２点ともに後期後葉の産物と推定される。

「参考文献」

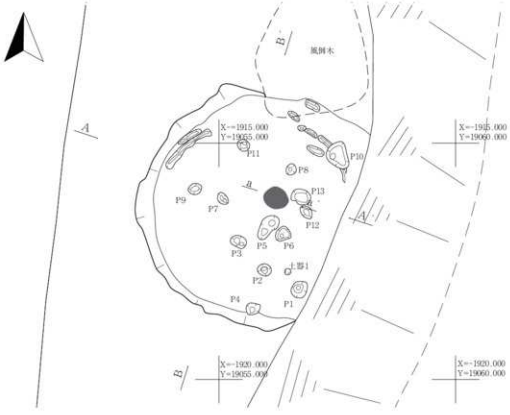
阿部昭典 2008『縄文時代の社会変動』小林達雄監修未完成考古学叢書６

小林圭一 2015「国宝「合掌土偶」の編年的位置－風張（１）遺跡第15号竪穴住居跡出土土器の検討を通して－」『東北芸術工科大学東北文化研究センター研究紀要』14

森 幸彦 2008「大木９・10式土器」『総覧縄文土器』

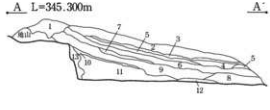
財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1984『上斗内Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡発掘調査報告書』岩文振第71集

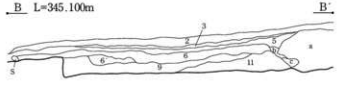
財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1985『川口Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩文振第84集



SI01柱穴状土坑一覧表（cm）

番号	平面規模	深さ
1	40×32	20
2	32×24	13
3	36×26	21
4	34×26	20
5	58×34	12
6	34×32	10
7	26×22	11
8	26×22	26
9	28×24	9
10	58×48	18
11	28×24	9
12	34×24	10
13	42×28	12

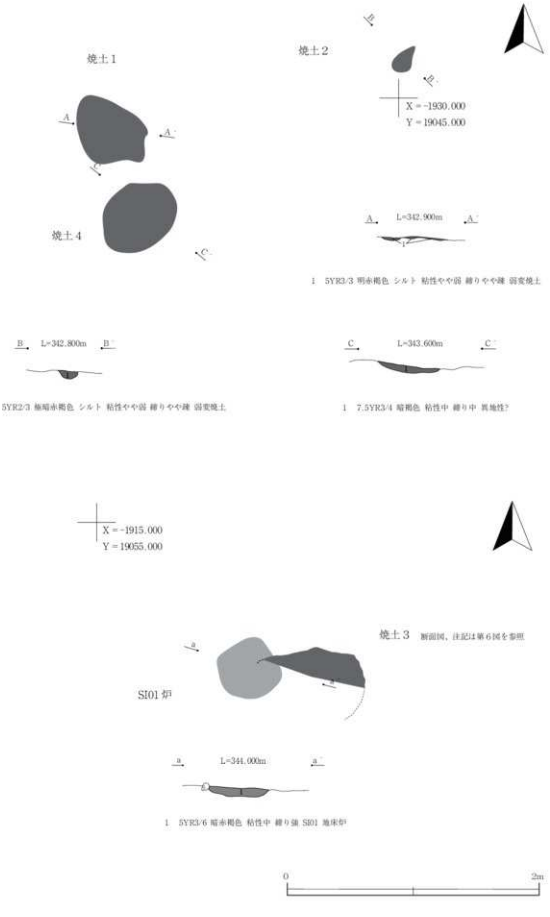




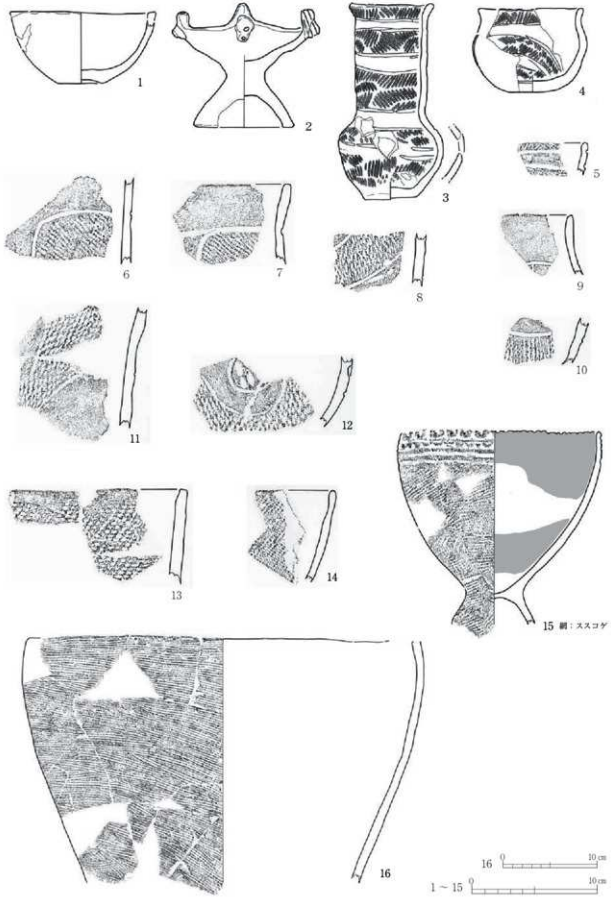
1　10YR2/1　黒色 シルト 粘性中 締りやや弱 細かい根多い 視乱層
2　10YR1.7/1 黒色 シルト 粘性中 締りやや強 混入物なし
3　10YR5/4　にぶい黄褐色 テフラ（砂質様）粘性なし 締りやや強
4　7.5YR3/3 暗褐色シルト 粘性中 締りやや強 下位に10YR4/6（やや赤みの強い）焼土含む（焼土3）
5　10YR2/2　黒褐色 シルト 粘性中 締りやや強（やや赤みがかって見える）
6　10YR1.7/1 黒色シルト 粘性中 締りやや強 2層とほぼ同じ
6~9とほぼ同じ（6と9の中間色）
7　10YR2/3 黒褐色シルト 粘性中 締りやや強（6よりやや明るく見える程度）
8　10YR3/3 暗褐色シルト 粘性中～やや強 締りやや強 炭、焼土粒少量、白色粒少量
9　10YR2/2 黒褐色シルト 粘性中 締りやや強 炭、焼土粒微量
10　7層と同じ
11　10YR2/3 黒褐色シルト 粘性中 締りやや強 白色粒微量
12　11層の土に炭、焼土粒 やや多量 8の直上
13　10YR3/3 暗褐色シルト 粘性中 締りやや強 10YR4/6 地山の大きなブロック含む 崩壊の崩落土
a～c　木根カクラン

0　5m

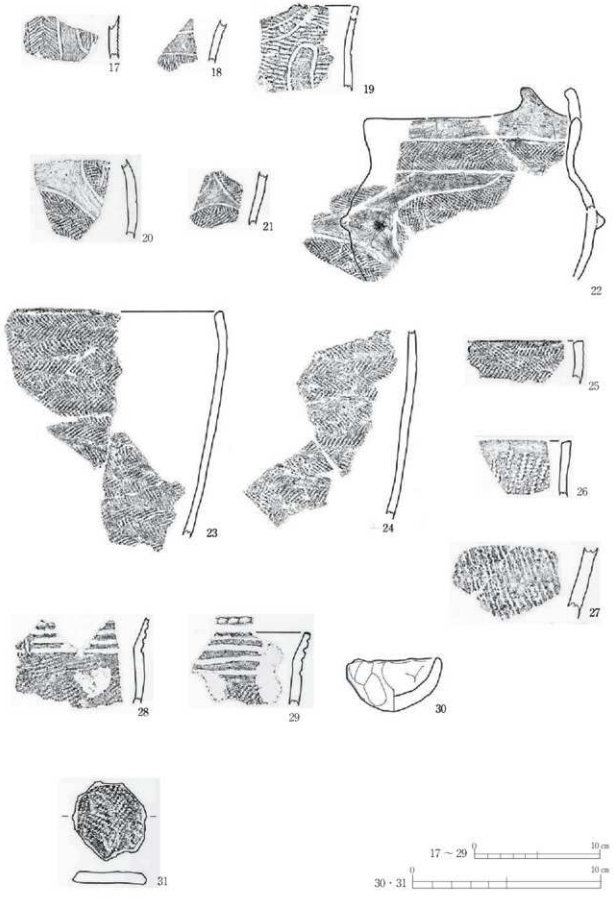
第6図　SI01


焼土1
A
A'
焼土4
C
C'
焼土2
B
B'
X＝-1930.000
Y＝19045.000
A
L=342.900m
A'
1　5YR3/3 明赤褐色 シルト 粘性やや弱 締りやや緩 弱変焼土
B
L=342.800m
B'
1　5YR2/3 極暗赤褐色 シルト 粘性やや弱 締りやや緩 弱変焼土
C
L=343.600m
C'
1　7.5YR3/4 暗褐色 粘性中 締り中 異地性?
X＝-1915.000
Y＝19055.000
焼土3　断面図、注記は第6図を参照
a
a'
SI01 炉
a
L=344.000m
a'
1　5YR3/6 暗赤褐色 粘性中 締り強 SI01 地床炉
0
2m

第7図　焼土・炉



第８図　遺物１



第９図　遺物２

5　まとめ

縄文時代後期の竪穴住居１棟、縄文時代の焼土４基が検出された。出土遺物は縄文時代の土器が中コンテナ１箱弱である。中期、後期、晩期の土器がみられたが、石器類は注意して調査したにもかかわらず出土しなかった。これら検出遺構及び出土遺物から、多少盛衰が考えられるものの、縄文時代中期から晩期にかけて小規模な集落が営まれていた場所であることが明らかになった。中期と晩期の遺構は見つからなかったが、調査区外南側には比較的平坦な地形が広がっており、こちらに遺跡は延びていると推測される。恐らく今回の調査区は遺跡の北端部にあたるのであろう。

本遺跡は非常に狭い谷部に立地する。河川漁撈に適さず、当地は石材産地でもない。更に上流部が峠になっているわけでもない。距離的に近い上斗内Ⅲ遺跡は縄文時代後期後葉を中心とし、本遺跡と時期的にも重なるが、立地は丘陵上になる。こうした遺跡占地の違いについては今後の検討課題としたい。

縄文時代後期の竪穴住居を覆っていたテフラは、削平を受けていない調査区の南西部でも確認された。分析結果は別記の通りであるが、八幡平市平舘地区では、遺跡とテフラの関係について分析された事例がほとんどなく、本遺跡の検出状況は有益な資料となろう。

なお、枇沢Ⅱ遺跡令和３年度調査に関わる報告はこれをもって全てとする。

第１表　出土遺物観察表

掲載番号	出土地点・層位	器種	残分部	口縁口唇	文様・特徴	時　期	備　考
1	SI01 竪穴住居床面	浅鉢	ほぼ完形	平縁	口～胴：無文　底：上底　内面：ミガキ	後期	平面図土器1
2	SI01 竪穴住居床面	台付き浅鉢	ほぼ完形	平縁突起4単位	口：無文、貼り付け（団子状で上部の突起に繋がる貫通孔あり）　台部：傘状　内面：粗いナデ	十腰内4式	
3	SI01 竪穴住居埋土11層～床面	壺	ほぼ完形	平縁	沈線モチーフ→充填縄文（LR・RL 非結束羽状縄文）→沈線引き直し→ミガキ、意図的な穿孔有　内面：ミガキ	十腰内4式	
4	SI01 竪穴住居埋土11層～下面	浅鉢	3/4完形	平縁	沈線モチーフ（櫛掛け状）→充填縄文（LR・RL 非結束羽状縄文）→沈線引き直し→ミガキ　内面：ミガキ	十腰内4式	赤色顔料塗布？
5	SI01 竪穴住居8・9層	壺？	口縁部破片	平縁	横位平行沈線→LR 充填縄文　内面：ナデ	十腰内4式か	
6	SI01 竪穴住居8・9層	深鉢	胴部破片		LR 縄位→沈線モチーフ→磨消縄文　内面：ヨコナデ	大木10式	7と同一個体か
7	SI01 竪穴住居5層	深鉢	口縁部破片	平縁面取	LR 縄位→沈線モチーフ→磨消縄文　内面：ヨコナデ	大木10式	6と同一個体か
8	SI01 竪穴住居埋土上位（テフラの下）	深鉢	胴部破片		RRL（直前段半撚）縄位→沈線モチーフ→磨消縄文　内面：ナデ	大木10式	11・12と同一個体
9	SI01 竪穴住居床面	深鉢	口縁部破片	平縁	沈線　内面：ミガキ	大木10式	胎土良、10・17・18と同一個体
10	SI01 竪穴住居埋土6層	深鉢	胴部破片		沈線モチーフ→直前段反撚縄位　内面：ミガキ	大木10式	胎土良、9・17・18と同一個体
11	SI01 竪穴住居埋土（テフラの下）・SI01 南側カクラン		胴部破片		RRL（直前段反撚）縄位→沈線モチーフ→磨消縄文　内面：ナデ	大木10式	8・12と同一個体
12	SI01 竪穴住居埋土（テフラの下）・5層		胴部破片		RRL（直前段反撚）縄位→沈線モチーフ→磨消縄文、刺突文　内面：ナデ	大木10式	8・11と同一個体
13	①SI01 竪穴住居埋土下位・8・9層②T5付近黒色土	深鉢	口縁部破片	平縁面取	RLR 縄位　内面：ミガキ	大木10式か	

14	SI01 竪穴住居埋土（テフラの下）	深鉢	口縁部破片	平縁	LR 横位　内面：ヨコナデ	後期？	
15	①SI01 竪穴住居埋土上位（テフラの下）・5 層②盛土下エリア黒色土	台付き鉢	はば完形	連続二子状小突起	沈線、羊歯状文、RL＋付加条　内面：ナデ、ススコゲ	大洞 BC 式	施文原体が所々 LR に見える部分あり
16	T5 黒色土	深鉢	口縁部大破片	平縁面取	条線文（3 条の櫛歯状工具による施文）内面：ミガキ、焼けはじけ多	後期	口縁外面スス付着
17	盛土下エリア風倒木痕	深鉢	胴部破片		沈線モチーフ→直前段反撚縦位→短沈線による矢羽状　内面：ナデ	大木 10 式	胎土良、9・10・18 と同一個体
18	盛土下エリア黒色土	深鉢	胴部破片		沈線モチーフ→直前段反撚縦位　内面：ナデ	大木 10 式	胎土良、9・10・17 と同一個体
19	盛土下エリア黒色土	深鉢	口縁部破片	波状縁	L 斜位→沈線モチーフ→磨消縄文　内面：ナデ	後期初頭	並崖式？
20	T5 付近黒色土	鉢？	胴部破片		沈線モチーフ→充填縄文（LR・RL 非結束羽状縄文）→沈線引き直し→ミガキ　内面：ナデ	十腰内 4 式	
21	北西側盛土下エリア黒色土	鉢？	破片		沈線モチーフ→充填縄文（LR・RL 非結束羽状縄文）→沈線引き直し→ミガキ　内面：ミガキ	十腰内 4 式	
22	T5 付近黒色土		口～胴部大破片	平縁突起 4 単位	沈線モチーフ→充填縄文（LR・RL 非結束羽状縄文）→沈線引き直し→（帯縄文以外）ミガキ→貼瘤　内面：ヨコミガキ	十腰内 4 式	
23	T5	深鉢	口縁部大破片	平縁面取	LR・RL 非結束羽状縄文　内面：ナデ	後期後半	24・25 と同一個体
24	T5	深鉢	胴部破片		LR・RL 非結束羽状縄文　内面：ナデ	後期後半	23・25 と同一個体
25	T5 付近黒色土	深鉢	口縁部	平縁面取	LR・RL 非結束羽状縄文　内面：ナデ	後期後半	23・24 と同一個体
26	盛土下エリア黒色土	深鉢	口縁部破片	平縁面取	RL 縦位　内面：ミガキ	後期？	
27	盛土下エリア黒色土	深鉢	胴部破片		単軸絡条体第 1 類　内面：ナデ	後期？	
28	南側斜面部 T5 付近黒色土（テフラの下）	深鉢？	胴部破片		口：横位平行沈線（押し引き状）　胴：LR 横位　内面：ナデ	晩期後半	29 と同一個体か
29	T5 付近黒色土	深鉢？	口縁部破片	微波状（指頭圧痕）	口：横位平行沈線（4 条、押し引き状）　胴：LR 横位　内面：ナデ	晩期後半	28 と同一個体か
30	盛土下エリア黒色土（テフラの下）	ミニチュア		微波状	手づくね整形、無文（指頭による調整痕多数）内面：ミガキ	後期	
31	SI01 埋土下位	円盤状土製品	土器片再利用		LR・RL 非結束羽状縄文　内面：ナデ	後期後半	

桧沢Ⅱ遺跡出土火山灰の分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

八幡平市に所在する桧沢Ⅱ遺跡は、岩手山北麓を流下する赤川上流域左岸に広がる山地の末端を構成する緩斜面上に位置する。この緩斜面は、岩手山より発生した岩屑なだれ堆積物により構成されている（小池ほか編 2005）。これまでの発掘調査では、縄文時代とされる竪穴住居跡や焼土遺構などが確認されている。

本分析調査では、竪穴住居跡を埋積する土層中に確認された火山灰（テフラ）とされる堆積物を対象として、テフラの検出同定と重鉱物・火山ガラス比分析および火山ガラスと斜方輝石の屈折率の測定を行うことにより、テフラの給源火山と噴出年代を明らかにする。

1．試料

試料は、竪穴住居跡（SI01）の埋土上層の３層から採取されたテフラサンプル３とされた堆積物１点である。試料の採取された土層断面（A-A'）の略図を図１に示す。試料の外観は、暗褐色を呈する砂質シルトである。

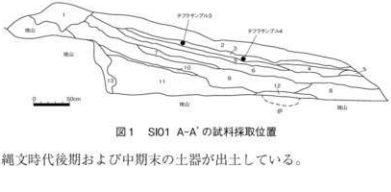


図１　SI01 A-A'の試料採取位置

なお、発掘調査所見によれば、竪穴住居跡の上層の３層直下からは縄文時代晩期の土器が出土しており、竪穴住居跡埋土下層からは、縄文時代後期および中期末の土器が出土している。

2．分析方法

(1) テフラの検出同定

試料約20ｇを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の３タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

(2) 重鉱物・火山ガラス比分析および屈折率測定

試料約40g に水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16mm 以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4mm-1/8mm の砂分をポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離、重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。重鉱物同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とする。火山ガラス比は、重液分離した軽鉱物分における砂粒を250粒数え、その中の火山ガラスの量比を求める。火山ガラスの形態分類は上述のテフラの検出同定と同様である。また、火山ガラス比における「その他」は、主に石英および長石などの鉱物粒と変質等で同

定の不可能な粒子を含む。

さらに火山ガラスと重鉱物の斜方輝石については、その屈折率を測定することにより、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、古澤（1995）のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。

3．結果

(1) テフラの検出同定

結果を表1に示す。多量の軽石と中量の火山ガラスが認められた。軽石は、最大径2.0mm、白色を呈し発泡良好のものと灰白色を呈し発泡やや良好およびやや不良のものとが混在する。火山ガラスは、無色透明の軽石型が多く、少量のバブル型も混在する。

(2) 重鉱物・火山ガラス比分析および屈折率測定

結果を表2、図2に示す。重鉱物組成は、斜方輝石と不透明鉱物が互いに同量程度で多く、少量の単斜輝石が含まれる。火山ガラス比では軽石型火山ガラスが多く含まれ、バブル型火山ガラスも少量含まれる。

火山ガラスの屈折率を図3に、斜方輝石の屈折率を図4に示す。火山ガラスの屈折率は、レンジはn1.504-1.508であり、モードはn1.505-1.507である。斜方輝石の屈折率は、γ1.706-1.708である。

表1　テフラ分析結果

遺構名	層名	試料名	スコリア	火山ガラス		軽石			
			量	量	色調・形態	量	色調・発泡度		最大粒径
SI01	3	テフラサンプル3	－	＋＋＋	cl･pm>cl･bw	＋＋＋＋	W･gGW･sgGW･sb		2.0

凡例　－：含まれない、(＋)：きわめて微量、＋：微量、＋＋：少量、＋＋＋：中量、＋＋＋＋：多量、
W：白色、GW：灰白色、
g：良好、sg：やや良好、sb：やや不良、b：不良、最大粒径はmm、
cl：無色透明、br：褐色、bw：バブル型、md：中間型、pm：軽石型

表2　重鉱物・火山ガラス比分析結果

遺構名	層名	試料名	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑レン石	ジルコン	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
SI01	3	テフラサンプル3	0	105	28	0	0	0	0	116	1	250	35	0	113	102	250

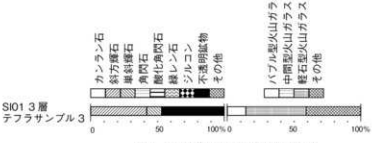


図2　重鉱物組成および火山ガラス比

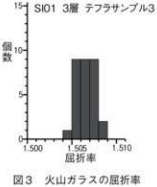


図3　火山ガラスの屈折率

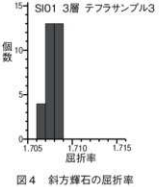


図4　斜方輝石の屈折率

4．考察

試料の採取された埋土の3層は、細粒の軽石および火山ガラスを主体とするテフラの降下堆積層であると判断される。細粒の軽石と火山ガラスにより構成されていることから、その給源火山は岩手山のような近接した火山ではなく、遠方の火山である可能性が高い。さらに、縄文時代の住居跡の埋土中に堆積していることから、縄文時代以降に噴出したテフラであると考えられる。上述した砕屑物の特徴および桔沢Ⅱ遺跡の地理

的位置と、これまでに研究された東北地方におけるテフラの産状（町田ほか（1981; 1984）、Arai et al.（1986）、町田・新井（2003）など）との比較から、テフラは十和田ａテフラ（To-a）または十和田ｂテフラ（To-b）に同定される。これらのうち、町田・新井（2003）に記載された火山ガラスの屈折率により、テフラはTo-aに同定される。なお、町田・新井（2003）のTo-aの火山ガラスの屈折率はn1.496-1.508の広いレンジを示す。ただし、n1.502以下の低い屈折率の火山ガラスを主体とする火山灰層は、南方へは広がらず、十和田カルデラ周辺とその東方地域に分布が限られるとされている（町田ほか,1981）。今回検出されたテフラは、低屈折率の火山ガラスを含まないTo-aに相当するものと考えられる。一方、町田・新井（2003）のTo-bの火山ガラスの屈折率はn1.498-1.501であり、今回の試料のそれに比べて明らかに低い値である。

なお、To-aの噴出年代については、早川・小山（1998）による文献も含めた詳細な調査によれば、西暦915年とされている。また、To-bの噴出年代については縄文時代晩期の暦年で2800年前とされている（工藤・佐々木,2007）。前述したように3層の直下からは縄文時代晩期の土器が出土しているが、上述したように3層のテフラはTo-aであり、To-bではない。おそらく、出土土器が示す年代は土層の埋積年代を示すものではなく、後代の流れ込みなどによるものと考えられる。竪穴住居跡の床面と埋土層が斜交している状況からも、住居跡の埋積過程において削剥や流れ込みのあったことが窺える。

引用文献

Arai,F.・Machida,H.・Okumura,K.・Miyauchi,T.・Soda,T.・Yamagata,K.1986,Catalog for late quaternary marker-tephras in Japan Ⅱ－ Tephras occurring in Northeast Honshu and Hokkaido －.Geographical reports of Tokyo Metropolitan University No.21,223-250.

古澤　明.1995, 火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別 . 地質学雑誌 ,101,123-133.

早川由紀夫・小山真人.1998, 日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日－十和田湖と白頭山－ . 火山 ,43,403-407.

小池一之・田村俊和・鎮西清高・宮城豊彦編.2005, 日本の地形3　東北 , 東京大学出版会 ,355p.

工藤　崇・佐々木　寿.2007, 十和田火山後カルデラ期噴出物の高精度噴火史編年 . 地学雑誌 ,116,653-663.

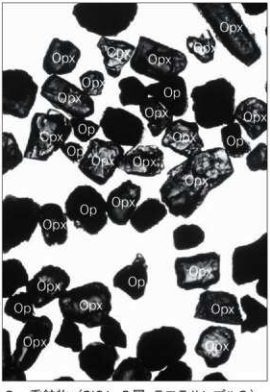
町田　洋・新井房夫.2003, 新編　火山灰アトラス , 東京大学出版会 ,336p.

町田　洋・新井房夫・森脇　広.1981, 日本海を渡ってきたテフラ , 科学 ,51,562-569.

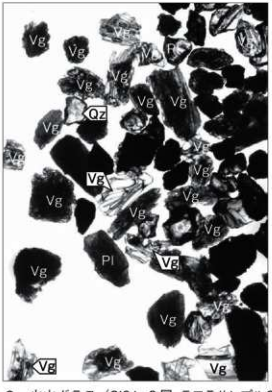
町田　洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦.1984, テフラと日本考古学－考古学研究と関連するテフラのカタログ－ , 渡辺直経（編）古文化財に関する保存科学と人文・自然科学 , 同朋舎 ,865-928.

図版１　テフラ・重鉱物・火山ガラス

１．軽石（SI01　３層　テフラサンプル３）



２．重鉱物（SI01　３層　テフラサンプル３）



３．火山ガラス（SI01　３層　テフラサンプル３）

Opx：斜方輝石．Cpx：単斜輝石．Op：不透明鉱物．
Vg：火山ガラス．Qz：石英．Pl：斜長石．

2.0mm　0.5mm
1　2,3

遺跡遠景（南から）

遺跡遠景（北西から）

写真図版１　航空写真

調査区全景（東から）

調査区全景（北から）

調査区現況（南東から）

調査区現況（南から）

SI01精査中（北から）

写真図版２　調査区全景、調査区現況ほか

調査区全景（東から）

SI01　完掘（東から）

写真図版３　調査区全景、SI01

SI01　断面（南から）

SI01　断面（東から）

SI01　完掘（北から）

写真図版４　SI01

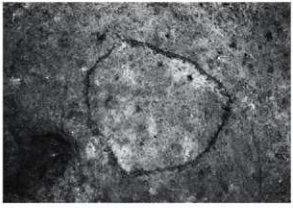
SI01　完掘（南から）

SI01 断面（南西から）

SI01炉平面（上が北）

SI01炉断面（南から）

写真図版５　SI01、SI01炉

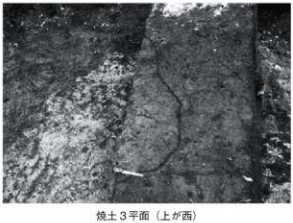


焼土１平面（上が北）

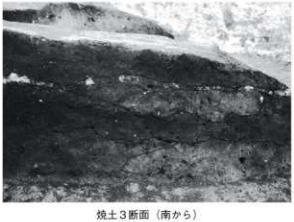
焼土１断面（南から）

焼土２（上が北）

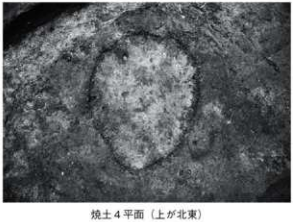
焼土２断面（南西から）



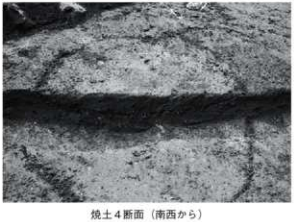
焼土３平面（上が西）



焼土３断面（南から）



焼土４平面（上が北東）



焼土４断面（南西から）

写真図版６　焼土１～４

Ｔ１（東から）

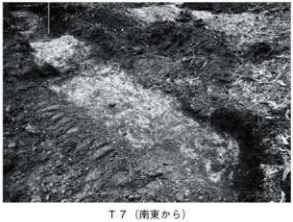
Ｔ２（東から）

Ｔ３（南西から）

Ｔ４（東から）

Ｔ５（北東から）

Ｔ６（南東から）



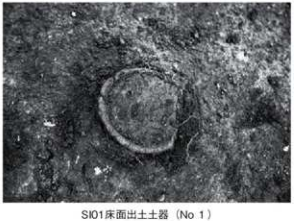
Ｔ７（南東から）

Ｔ８（東から）

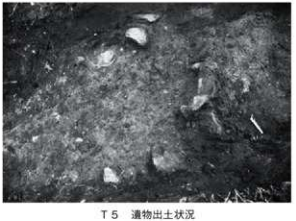
写真図版７　Ｔ１～Ｔ８

沢跡断面（東から）

SI01精査中（南から）



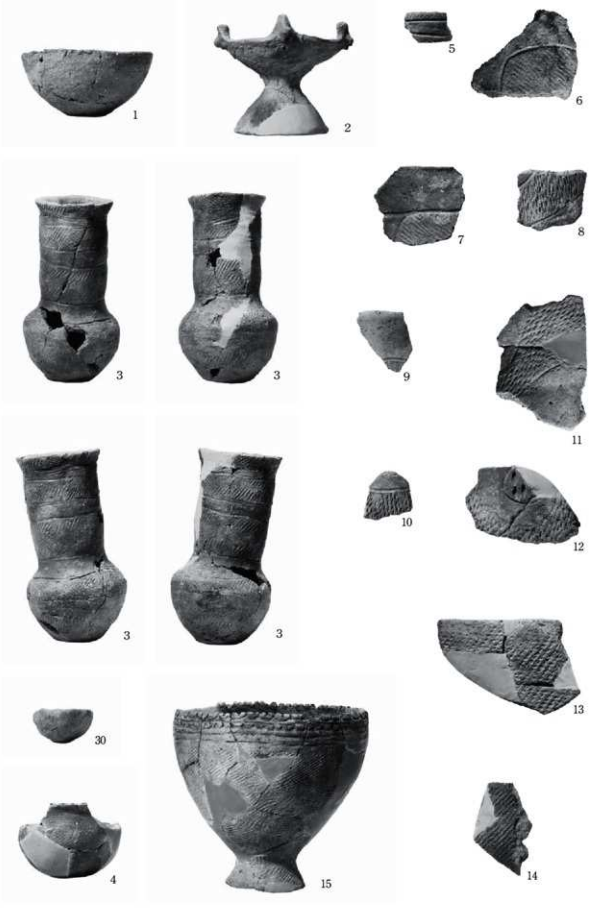
SI01床面出土土器（No.1）



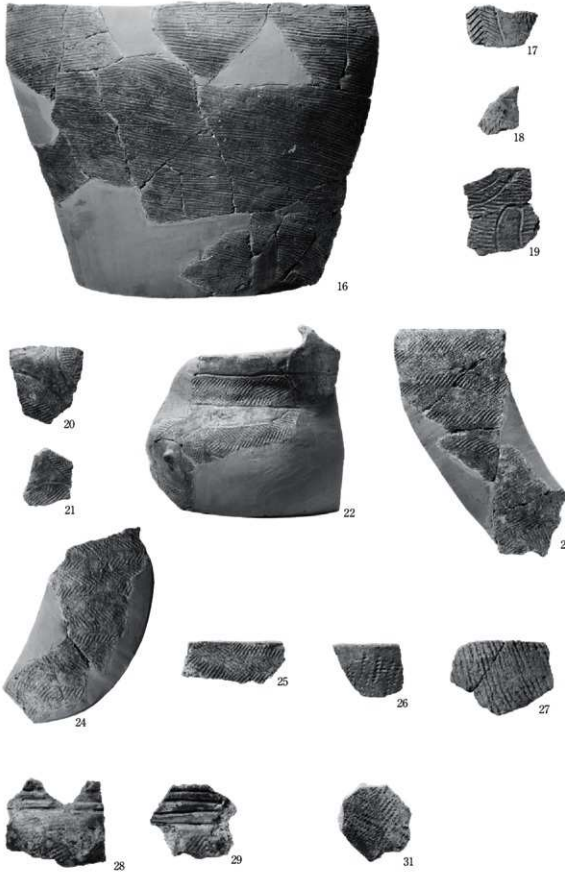
T5　遺物出土状況

基本土層（南西から）

写真図版8　沢跡、遺物出土状況、基本土層ほか



写真図版９　出土遺物１



写真図版10　出土遺物２

（3）　大谷地（おおやち）Ⅲ遺跡

所　在　地	花巻市諏訪・大谷地地内	**遺跡コード・略号**	ME35-1229・OYTⅢ-21
委　託　者	花巻市建設部道路課	**調査対象面積**	105㎡
事　業　名	都市計画道路山の神諏訪線道路整備事業	**調査終了面積**	105㎡
発掘調査期間	令和３年９月16日～９月30日	**調 査 担 当 者**	富川 悟

１　調査に至る過程

大谷地Ⅲ遺跡は、都市計画道路山の神諏訪線道路整備事業の施工に伴って、その事業区域内に存在することから、発掘調査を実施することになったものである。

都市計画道路山の神諏訪線は県道山の神西宮野目線（旧国道４号）から県道花巻和賀線へ接続する。当該路線の整備により国道４号から市街地へのアクセスが格段に改善し、今後の市産業の発展を図るものである。

大谷地Ⅲ遺跡は、岩手県教育委員会作成の県遺跡台帳登録済み、周知の遺跡である。当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、花巻市道路課から花巻市教育委員会文化財課へ平成29年６月９日、「埋蔵文化財発掘の届出〔通知〕」により届出［通知］を行い、教育委員会より試掘調査が必要な旨の勧告を受けている。

市道路課より依頼を受けた花巻市教育委員会は平成29年11月27日及び令和元年11月18～19日に試掘調査を実施し、発掘調査が不要の旨を令和元年12月２日、１花教文第3-023号「埋蔵文化財試掘調査結果について（通知）」により回答した。

しかしながら、（仮称）花巻ＰＡインターチェンジ整備事業に伴う発掘調査を実施したところ、一部遺構が（仮称）花巻ＰＡインターチェンジ整備事業範囲から都市計画道路山の神諏訪線事業範囲へ連続して埋蔵されている可能性が非常に高いとの現状が経過報告により判明した。当時の試掘調査でこれが分かりえなかった原因として、当該遺構が試掘の際のトレンチの隙間にあったこと、当該要調査地が周辺土地に比べ重機の入りづらい環境であったため後の現状復旧作業等を検討すると試掘が困難であった等が挙げられる。

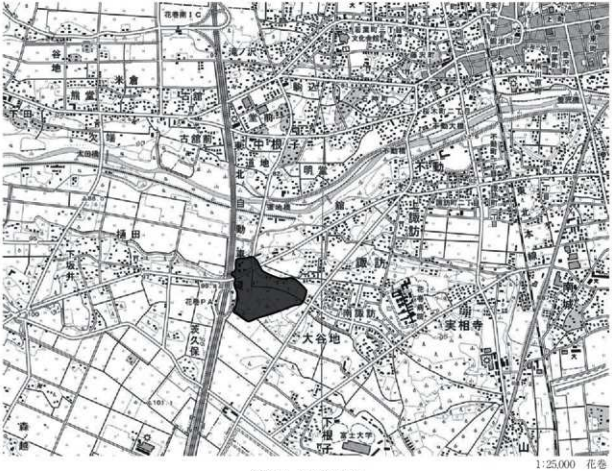
この結果を踏まえ、当課は岩手県教育委員会と協議を行い、大谷地Ⅲ遺跡に係る追加調査を岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。これに伴い令和３年９月15日付けで、花巻市と公益財団法人岩手県文化振興事業団理事長との間で、委託契約を締結し、大谷地Ⅲ遺跡の発掘調査を実施することとなった。　（花巻市建設部道路課）

２　周辺の位置と立地

大谷地Ⅲ遺跡は、東北縦貫自動車道花巻パーキングエリアの東に隣接する。花巻市役所からは南西に2.75㎞の距離にある。豊沢川右岸の扇状地性中位段丘上に立地し、調査区の標高は約94.7mである。北上川沿いの中位段丘は村崎野段丘と呼ばれているもので、周囲を低位の扇状地性段丘に囲まれた緩やかな起伏をもった開析扇状地面を呈し、構成層は砂及び粘土を基質とする礫層である。

３　基本層序

基本土層は、Ⅰ層表土（現耕作土）、Ⅱ層暗褐色土（縄文時代～古代検出面）、Ⅲ層褐色土、Ⅳ層黄褐色土、Ⅴ層灰褐色土となっている。遺構内に堆積している黒褐色土は基本層序Ⅱ層の上に堆積していたはずであるが、後世の削平が著しく基本層序で確認することができていない。



第１図　遺跡位置図

４　調査の概要

本調査は、（仮称）花巻ＰＡインターチェンジ整備事業発掘調査で検出した溝跡が、都市計画道路山の神諏訪線道路整備事業区内に延びている蓋然性が非常に高いことから調査を行ったものである。調査に至る経過は、第１章のとおりである。

本調査区内において、溝跡１条が延伸していることを確認した。他に遺構・遺物は検出していない。

（１）遺構

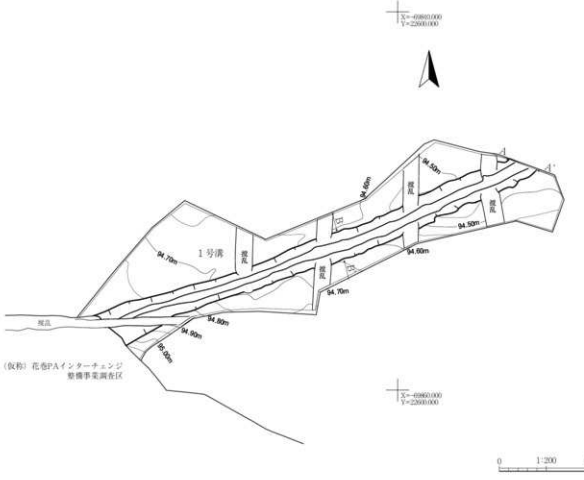
１号溝　（第２図、写真図版１・２）

〔位置・検出状況〕　調査区中央、Ｘ＝-69850.000・Ｙ＝22600.000付近に位置する。表土直下がⅢ層となっており、不明瞭な暗褐色土の溝を検出した。

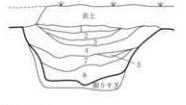
〔形状・規模〕　南西－北東方向に走行する。本調査区内の全長は23.5m、検出面幅は1.5m、底面幅は50cm、残存深度は63～70cm である。断面形状は、溝南西側は検出面に向けて広がるＵ字形を呈し、北東にかけて浅くなりつつ逆台形を呈する。

〔埋土・堆積状況〕　埋土は掘り上げ土と考えられるⅡ層暗褐色土を主体とし、基本層序で確認できていない黒褐色土が暗褐色土の間層に２度にわたって堆積している。土断面Ａ－Ａ’で確認した３層暗褐色土層は、（仮称）花巻ＰＡインターチェンジ整備事業調査区検出面で確認した灰白色火山灰を含む層に相当すると考えられる。本調査区内の黒褐色土層では火山灰を確認することができなかったが、灰白色火山灰は十和田ａ降下火山灰と考えられ、９世紀代には堆積が進んでいると考えられる。

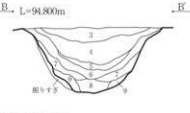
〔重複・関連遺構〕　重複する遺構は認められない。



1号溝　A-A'



1号溝　B-B'



1号溝　A-A'　B-B'
1　10YR3/3暗褐色シルト　粘性：やや弱　締り：やや緩　10YR4/4褐色土ブロック直径1～5cm大40%斑状に含む（一部ラミナ状）
2　10YR2/2黒褐色シルト　粘性：強　締り：緩　土壌化層
3　10YR3/4暗褐色シルト　粘性：やや強　締り：やや密　10YR4/4褐色土ブロック直径1～5cm大5%点状に含む
4　10YR3/3暗褐色シルト　粘性：やや弱　締り：やや緩　10YR4/4褐色土ブロック直径1～5cm大40%斑状に含む（一部ラミナ状）
5　10YR2/2黒褐色シルト　粘性：強　締り：やや緩　土壌化層
6　10YR3/3暗褐色シルト　粘性：やや強　締り：やや密
7　10YR4/3にぶい黄褐色シルト　粘性：やや強　締り：やや密　壁面からの地山自然流入土？
8　10YR6/6明黄褐色シルト　粘性：強　締り：密　10YR4/3にぶい黄褐色土ブロック直径3～5cm大20%斑状に含む
9　10YR3/2黒褐色シルト　粘性：やや強　締り：やや密

0　1:40　1m

第2図　1号溝

〔出土遺物〕（第３図、写真図版２）

１号溝埋土上～中位から土師器坏・甕、須恵器壺、縄文土器片が出土している。１は内外面ヘラミガキ・内面黒色処理が施された土師器坏で、外面に沈線が１条巡る。外面の沈線より上位にヘラミガキが施され、内面の黒色処理が外面に一部及んでいる。２・３は内外面ハケメ調整の土師器甕である。４は埋土中位から逆位で出土した須恵器壺で、胴部上半～頸部が欠損している。貼付高台は外傾する。５は縄文土器である。ＲＬ施文で、このような縄文土器は（仮称）花巻ＰＡインターチェンジ整備事業調査区内で複数出土しており、溝掘り上げ土に包蔵されていたものが再堆積したと考えられる。

〔遺構の時期〕 埋土中位から出土した１土師器坏及び４須恵器壺は９世紀前半の特徴を示しており、１号溝はそれよりも古い時期と考えられる。

（２）遺物

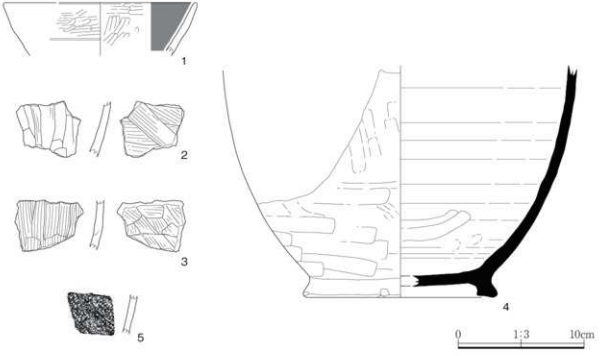
１号溝出土遺物の他、遺構外から遺物は出土していない。

表１ 出土遺物一覧

番号	出土地点・層位	種別・器種	部位	法量	調整・特徴
1	１号溝・埋土中位	土師器・坏	口縁部	口径(15.2)cm・高4.2cm	内面ヘラミガキ→黒色処理、外面沈線上位ヘラミガキ
2	１号溝東端・埋土上層	土師器・甕	胴部	高4.4cm	内外面ハケメ
3	１号溝・埋土中位	土師器・甕	胴部	高3.9cm	内外面ハケメ
4	１号溝・埋土中位	須恵器・壺	胴部～底部	底径(14.7)cm・高18.4cm	ロクロ→下位ヘラケズリ・貼付高台外傾
5	１号溝・埋土中位	縄文土器・深鉢	胴部	高3.1cm	RL

５ まとめ

調査の結果、１号溝は（仮称）花巻ＰＡインターチェンジ整備事業調査区から延伸する溝であることを確認した。埋土中位には９世紀前半の坏・壺が出土していることから、９世紀初頭には堆積が進んでいたと推定できる。なお、大谷地Ⅲ遺跡に関わる報告はこれをもって全てとする。



第３図 出土遺物

大谷地Ⅲ遺跡遠景（東から）

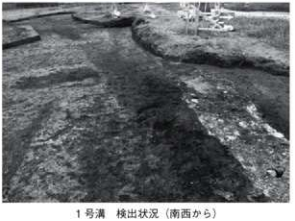
1号溝全景（南西から）

写真図版1　遺跡遠景、1号溝全景

1号溝　A－A'断面（西から）

1号溝　B－B'断面（西から）

1号溝　遺物出土状況（東から）



1号溝　検出状況（南西から）

出土遺物

写真図版２　１号溝、出土遺物

Ⅱ　発掘調査概報

凡　例

・遺跡位置図は、1：50,000である。国土地理院2001『数値地図－岩手』を使用した。

・本書で記載されているコンテナの大きさは内寸で下記のとおりである。

大コンテナ：42×32×30㎝

中コンテナ：42×32×20㎝

小コンテナ：42×32×10㎝

・本書では、遺構名称を簡素化し、遺構名称末尾に付す「跡」を省略する。

（例）竪穴住居跡→竪穴住居、掘立柱建物跡→掘立柱建物、溝跡→溝

（4）力持遺跡

所　在　地　下閉伊郡普代村第16地割天拝坂地内
委　託　者　国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事　業　名　三陸沿岸道路
発掘調査期間　令和3年4月6日～8月3日
調査終了面積　178㎡
調査担当者　村上 拓・川又 晋
主要な時代　縄文時代

遺跡の立地

遺跡は、普代村第16地割天拝坂地内、力持川河口から南南西約1.2kmに位置する。力持川と刺畑沢の合流点付近の低地に連続する緩斜面地に立地している。

調査の概要

検出遺構は、縄文時代竪穴住居21棟、土坑10基、配石遺構３基、炉８基、柱穴状土坑128個である。出土遺物は、縄文時代土器（前期～後期）大コンテナ40箱、石器・石製品（石鏃・石錐・石匙・削掻器・石斧・敲磨器類・石皿・垂飾具ほか）大コンテナ１箱、コハク細片少量等である。

今次調査区は、平成26年度に当センターが橋脚部分を調査した力持高架橋の真下に相当し、路線側縁に設置するフェンス及び排水設備の範囲が対象となった。

既往調査の成果から予想されたとおり、今次調査区においても縄文時代住居等の遺構が極めて高い密度で重複して確認された。検出遺構は竪穴住居及びその付属施設と、フラスコ形土坑群とに大別され、前者が後者を切る傾向がみられた。当該地点の利用状況の変遷を示唆しており、出土遺物の年代観や層位的事実をもとに検討を深めたい。

調査区全景（東上空から）

住居内の遺物出土状況（南から）

重複する住居群（南東から）

（5）サンニヤⅢ遺跡

所　在　地　九戸郡洋野町種市第25地割地内
委　託　者　国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事　業　名　三陸沿岸道路
発掘調査期間　令和３年10月５日～12月15日
調査終了面積　1,882㎡
調査担当者　溜　浩二郎・八木勝枝
主要な時代　縄文

遺跡の立地

遺跡は、九戸郡洋野町種市第25地割に所在し、川尻川右岸の標高52～65m地点に立地する。遺跡中央部は谷底、南北端は傾斜面となっている。今回の調査区は南側の斜面に立地し、標高は59～65m程度、調査面積は1,882㎡である。調査前の現況は盛土で覆われていた。

調査の概要

今年度調査区は全域が過去の造成により削平を受けている状況であった。検出遺構は、陥し穴状遺構５基でうち３基は列状に配置されているのを確認した。出土遺物はないが、遺構検出状況から過去の調査成果と同様、縄文時代の狩猟場の一部と考えられる。

調査区全景（上が東）

陥し穴状遺構　平面

作業風景

陥し穴状遺構　断面

（6）間野村（あいのむら）・境（さかい）遺跡

所　在　地　紫波郡紫波町星山字間野村１、犬吠森字境128－５
委　託　者　岩手県盛岡広域振興局土木部
事　業　名　主要地方道紫波江繋線星山地区道路改良工事
発掘調査期間　令和３年10月１日～11月５日
調査終了面積　620㎡（間野村90㎡、境530㎡）
調査担当者　福島正和・高木 晃・富川 悟
主要な時代　平安

遺跡の立地

遺跡は、JR 東北本線紫波中央駅の東2.8km、北上川の東岸低位段丘に立地する間野村遺跡と JR 東北本線紫波中央駅の東2.0km、北上川の東岸に接する自然堤防上に立地する境遺跡である。間野村遺跡は昨年度調査した範囲の東側を調査した。調査前は畑であった標高約97mの地点である。一方、境遺跡は北上川に架かる紫波橋の近くに位置し、調査前は畑であった標高約93mの地点である。

調査の概要

検出遺構は、間野村遺跡では昨年度調査区から延びる堀１条、時期不明の土坑１基および掘立柱建物１棟、境遺跡では平安時代の竪穴住居２棟、土坑２基、溝１条、小ピット１基である。間野村遺跡の堀は２条併走する内側の１条を今回の調査で検出したと考えられる。この堀は調査区東端で検出し、南北方向であることから、西から延び緩やかなカーブを描いて南へ向かうことが予想される。境遺跡の竪穴住居２棟は、滞水時に運ばれ乾燥時に残された堆積層で埋没していた。２基の土坑は、平面方形基調であり、焼土や炭化物が多く含むことから土器焼成遺構である可能性が考えられる。昨年度調査した間野村遺跡で確認した平安時代集落とは低湿地を挟んで隣接する集落であったと考えられる。

出土遺物は、間野村遺跡では、近世陶磁器が数点みられたのみであるが、境遺跡では遺構や遺物包含層から出土した平安時代の土師器・須恵器大コンテナ３箱、土錘１点がみられる。

紫波郡域内の北上川東岸域は西岸域に比べると、埋蔵文化財の発掘調査件数が少なく地域的な様相は不明である。しかし、今回の発掘調査で平安時代の集落域が、北上川河畔近くまで展開していることが判明した。この調査成果からみて、近隣の同一地形面においても同様の遺跡が存在することを示唆している。

間野村遺跡直上からの全景

境遺跡全景（東上空から）

（7）中林下遺跡（なかばやししたいせき）

所　在　地　奥州市水沢真城字中林下95番地ほか
委　託　者　岩手県県南広域振興局農政部
事　業　名　経営体育成基盤整備事業（真城南地区）
発掘調査期間　令和３年４月７日～９月30日
調査終了面積　8,220㎡
調査担当者　北田 勲・杉沢昭太郎・川又 晋・袖林 清
主要な時代　平安・中世

遺跡の立地

遺跡は、奥州市水沢真城地区に所在し、西方に広がる河岸段丘の東縁に大深沢川が形成した小規模な扇状地に立地する。調査前の現況は水田である。

調査の概要

前年度に続き、２箇年目の調査である。検出遺構は、縄文時代晩期末～弥生時代初頭の土器埋設遺構１基、平安時代の掘立柱建物19棟、土坑２基、池状遺構６基、遺物集中２箇所、包含層・整地層1,000㎡、不明遺構（竪穴状）２基、戦国時代末の掘立柱建物12棟、堀２条、溝12条、土坑12基、池状遺構２基、柱穴状土坑1,150個（掘立柱建物分含む）である。

出土遺物は、縄文時代晩期末～弥生時代初頭の土器ビニール１袋、石器ビニール１袋、平安時代の土師器・須恵器大コンテナ12箱、木製品小コンテナ１箱、柱根・礎板・枕木など建築部材大コンテナ40箱、馬歯２点、戦国時代末の陶磁器４点、鉄鏃１点、銭貨２点、木製品大コンテナ３箱（下駄、木錘、曲物、桶、碗、蓋、樹皮籠、栓など）、柱根など建築部材大コンテナ10箱である。

平安時代中期の９世紀代を中心とする掘立柱建物19棟を検出し、前年度分と合わせて計32棟が確認された。柱穴の重複関係や建物の軸方向から複数の時期に分けられると考えられ、竪穴住居をほぼ伴わないことから、一般集落とは異なる公的な性格を持った律令期の建物群と考えられる。

また、前年度に北側から検出された居館跡と同規模・同形状の堀によって区画された居館跡が南側からも確認された。遺物の年代観から、戦国時代末（16世紀後半）までに廃絶したと考えられる。

平安時代及び戦国時代末の遺構からは、上記の木製品が多く出土し、確認された掘立柱建物の柱穴の多くには柱根やそれを支える礎板・枕木が水漬け状態で多量に遺存しており、残存しにくい有機物から当時の技術を考察する上で貴重である。

平安時代の掘立柱建物群全景（直上から）

掘立柱建物の柱穴断面

（8）明神下遺跡

所　在　地　奥州市胆沢若柳字下堰袋44－１ほか
委　託　者　岩手県県南広域振興局農政部
事　業　名　経営体育成基盤整備事業（若柳中部地区）
発掘調査期間　令和３年４月７日～７月30日
調査終了面積　7,930㎡
調査担当者　須原 拓・溜 浩二郎・村木 敬
主要な時代　平安・中世

遺跡の立地

遺跡は、国道397号線沿い、於呂閉志胆沢川神社の北側隣接地に位置し、胆沢川の南岸に形成された河岸段丘に立地する。標高は128m前後である。調査前は水田として利用されている。なお今回の調査は、昨年度からの継続調査である。

調査の概要

検出遺構は、竪穴住居・工房24棟、掘立柱建物15棟、土坑・陥し穴状遺構29基、溝14条、柱穴状土坑579個である。平安時代（９世紀後半から10世紀前半頃）に帰属するものが主体で、溝は中世以降と推測する。

出土遺物は、土師器・須恵器（９世紀後半から10世紀前半）が大コンテナ17箱、緑釉陶器片（９世紀中～後半）１点、砥石10点以上、羽口の破片数点、鉄製品（短刀・刀子・鉄鏃・紡錘車・穂積具など）50点以上、鉄滓数点などで、他に中世（16～17世紀）の陶器片数点、縄文土器片数点、黒曜石のスクレイパーや剥片20点以上が出土している。

２箇年にわたる調査で、平安時代の竪穴住居・工房を計93棟確認した。遺構内からは、土師器・須恵器の他に、緑釉陶器や石帯（昨年度）などが出土していることから、本遺跡は、該期における拠点的な集落であったと推測する。

特筆すべき点として、竪穴住居・工房から鉄製品が多く出土しており、２箇年で180点を数えた。出土した鉄製品には、武具（短刀・鉄鏃・刀の金具類など）も含まれており、胆沢域と関連する集落であった可能性がある。また刀子などの工具類や鉄滓も出土していることから、鉄製品の製作や手入れを集落内で盛んに行っていたものと推測する。

調査区全景（西上空から）

工房と考える遺構（西から）

（9）平清水Ⅰ遺跡・平清水Ⅱ遺跡

所　在　地　九戸郡野田村大字野田第22地割内
委　託　者　岩手県県北広域振興局農政部
事　業　名　農業競争力強化基盤整備事業（泉沢・中平地区）
発掘調査期間　令和３年４月６日～６月30日
調査終了面積　2,949㎡
調査担当者　阿部勝則・野中裕貴
主要な時代　縄文・古代

遺跡の立地

遺跡は、三陸鉄道北リアス線陸中野田駅から南西約2.5㎞付近に位置する。十府ヶ浦に向かって東に流れる明内川右岸の段丘に立地し、標高約60～68ｍで、現況は水田である。調査区の微地形は、南西から北東方向に延びる尾根とその間の谷などに分かれる。現在、段丘面を東西に走る２級村道中平上明内線を境に南側を平清水Ⅰ遺跡、北側を平清水Ⅱ遺跡と分けられている。調査は昨年度に引き続き行われたもので、今年度は平清水Ⅰ遺跡１路線（５区）720㎡、平清水Ⅱ遺跡７路線（６～12区）2,229㎡の調査を行った。

調査の概要

遺構・遺物は、平清水Ⅱ遺跡北側の８・10区と南側の12区で確認した。検出遺構は、縄文時代の竪穴住居２棟、土坑28基、陥し穴状遺構４基、古代の竪穴住居２棟である。縄文時代の竪穴住居は、円形基調と推測され、１棟には土器埋設炉を確認した。土坑の多くは、断面形がフラスコ状で、覆土から円筒下層式土器がまとまって出土した土坑もある。陥し穴状遺構は、平面形が溝状と楕円形のものがあり、楕円形の陥し穴状遺構の覆土には十和田中掘火山灰の堆積を確認した。古代の竪穴住居は、規模・形状など不明だが、覆土に十和田ａ火山灰の堆積を確認した。

出土遺物は、縄文土器、土師器、須恵器大コンテナ４箱、石器中コンテナ３箱、コハク片である。

竪穴住居や土坑を確認した８・10区は、縄文時代前期末葉から中期前葉の集落が確認された平成13・14年度調査区の南西側に位置する。今回の調査では、縄文時代の集落の南側と西側への広がりを確認することができた。平清水Ⅱ遺跡の縄文時代の集落は、遺跡範囲の北端に沿って南西から北東側に延びる尾根とその南斜面に広がるものと推測される。

遺跡近景（西から）

遺物出土状況（北から）

(10) 中平（なかたい）遺跡

所　在　地	九戸郡野田村大字野田第22地割138番地１
委　託　者	野田村
事　業　名	野田小学校建設事業
発掘調査期間	令和３年７月１日～令和３年11月12日
調査終了面積	4,630㎡（本調査区：3,630㎡、確認調査区：1,000㎡）
調査担当者	村木　敬・阿部勝則・杉沢昭太郎・村上　拓・野中裕貴
主要な時代	縄文・古代

遺跡の立地

遺跡は、野田村役場から南西約1.3㎞に位置し、明内川と泉沢川に挟まれた標高約50ｍの丘陵上に立地している。今回の調査区は、昭和29年に県史跡「野田竪穴住居址群」として登録された史跡指定範囲の北東側にあたる。調査前は畑地であった。

調査の概要

本調査区：検出遺構は、縄文時代前期の竪穴住居26棟、土坑５基、陥し穴状遺構５基、縄文時代中～後期の土坑３基、陥し穴状遺構32基、平安時代の竪穴住居11棟、土坑５基、時期不明の土坑22基、柱穴状土坑３個である。出土遺物は、縄文土器ビニール小２袋、土師器大コンテナ１箱、剥片石器類小コンテナ１箱、礫石器中コンテナ１箱、鉄製品２点、鉄滓７点、コハク６点などである。

確認調査区：検出遺構は、縄文時代前期の竪穴住居２棟、縄文時代中～後期の陥し穴状遺構４基、平安時代の竪穴住居13棟、時期不明の土坑43基である。

今回の調査では、尾根の頂部を中心に縄文時代前期と平安時代の集落が形成されていたことが判明した。また、縄文時代中～後期において狩猟場として機能していたことが確認できた。次年度以降も継続調査の予定である。

調査区全景

(11) 大谷地(おおやち)Ⅲ遺跡

所　在　地　花巻市諏訪・大谷地地内
委　託　者　花巻市建設部道路課
事　業　名　(仮称)花巻ＰＡインターチェンジ整備事業
発掘調査期間　令和３年４月８日～10月15日
調査終了面積　5,982㎡
調査担当者　八木勝枝・福島正和・富川 悟
主要な時代　縄文・奈良

遺跡の立地

遺跡は、東北縦貫自動車道花巻パーキングエリアの東に隣接し、豊沢川右岸の中位段丘上標高約95ｍの地点に位置する。調査前は畑地及び道路として利用されていた。

調査の概要

検出遺構は、縄文時代の陥し穴状遺構59基、埋設土器１基、奈良時代の竪穴住居３棟、住居状遺構１棟、溝６条、焼成遺構18基、周溝１基である。この他古代・古代以降の掘立柱建物３棟、柱穴状土坑50個、土坑23基、時期不明の焼土遺構１基を検出した。

出土遺物は、縄文時代土器片小コンテナ１箱、石器小コンテナ１箱、土師器坏・甕・赤彩球胴甕・赤彩坏・須恵器坏・短頸壺大コンテナ3.5箱、黒曜石３点、土製玉４点、寛永通宝１点、煙管１点である。赤彩土器は竪穴住居・溝から出土した他、焼成遺構18基のうち３基から検出した。

奈良時代の遺構で特筆されるのは環状の溝である。環状溝は幅約１ｍ・深さ30～47㎝で浅く、底面には凹凸が残されている。環状の最大直径は42ｍを測り、北側に１箇所出入口施設が認められる。環状溝の出入口から南に向かって内部に入ると西側に４本柱の掘立柱建物、東側に大形竪穴住居と住居状遺構が配置されている。環状溝内側南は同時代の遺構が認められない。環状溝の外側には小形竪穴住居・周溝・焼成遺構があり、溝には内外を区画する意図が考えられる。この他、調査区北端において東西に延びる弧状の溝を１条検出した。弧状溝は調査区内の長さ85ｍ、幅1.6～2.3ｍ・深さ0.5～１ｍで断面逆台形、底面は平滑に整えられた部分が多く、環状溝より強固な作りを呈する。

縄文時代の陥し穴状遺構は円形・楕円形・長楕円形・溝形があり調査区全体に散在するが、一部の楕円形陥し穴状遺構は並ぶ傾向が認められる。埋設土器は調査区南西で１基検出した。土器は胴下半部のみ出土しており詳細な時期判断が難しいが、縄文時代後～晩期と考えられる。

環状溝全景

赤彩甕焼成遺構調査状況

報告書抄録

ふりがな	れいわさんねんどはっくつちょうさほうこくしょ
書名	令和３年度発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第735集
編著者名	溜 浩二郎
編集機関	（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地　　TEL（019）638-9001
発行年月日	西暦2022年３月11日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
舘遺跡（たていせき）	岩手県（いわてけん） 奥州市（おうしゅうし） 水沢真城字（みずさわまんじょうあざ） 館地内（たてち）	03215	NE37-0010	39度 06分 27秒	141度 09分 14秒	2021.08.02 ～ 2021.09.27	1,000㎡	一般国道４号水沢東バイパス

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
舘遺跡	集落	平安時代	竪穴住居	１棟	土師器、陶磁器	
			土坑	４基		
		近～現代	井戸跡	１基	瀬戸、銭貨	
			土坑	３基		
			溝	２条		
		時期不明	柱穴状土坑	62個		

要約	今回の調査で古代・近世の遺構・遺物が見つかったことから、生活の場として利用されていたことが判明した。古代については遺構・遺物の検出状況から、集落の一部と推測されるが、後世の造成工事による影響により遺構の大半が削平されている状況であった。

＊緯度・経度は世界測地系（2011）による数値である。

報告書抄録

ふりがな	れいわさんねんどはっくつちょうさほうこくしょ
書名	令和３年度発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第735集
編著者名	杉沢昭太郎
編集機関	（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地　　TEL（019）638-9001
発行年月日	西暦2022年３月11日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
桂沢Ⅱ遺跡 （かつらさわ　い　せき）	岩手県（いわてけん） 八幡平市（はちまたいし） 平舘（たいらだて） 第２地割（だい　に　ちわり） 418番地（ばんち）	032140	KE04-2323	39度 58分 57秒	141度 03分 22秒	2021.10.01 ～ 2020.10.29	900㎡	公共関与型産業廃棄物最終処分場整備事業に係る発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
桂沢Ⅱ遺跡	集落	縄文	竪穴住居　１棟 焼土　４基	縄文土器	

要約	遺跡は赤川の支流である桂沢の上流部、狭い谷間の限られた緩斜面部に立地している。縄文時代後期の竪穴住居１棟と縄文時代の焼土４基が検出された。出土遺物は縄文時代の土器が中コンテナ１箱弱である。中期、後期、晩期の土器がみられたが、石器類は出土しなかった。多少盛衰が考えられるものの、縄文時代中期から晩期にかけて小規模な集落が営まれていた場所であることが明らかになった。中期と晩期の遺構は見つからなかったが，調査区外南側には比較的平坦な地形が広がっており、こちらに遺跡は延びていくと推測される。恐らく今回の調査区は遺跡の北端部にあたるのであろう。

＊緯度・経度は世界測地系（2011）による数値である。

報告書抄録

ふりがな	れいわさんねんどはっくつちょうさほうこくしょ
書名	令和３年度発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第735集
編著者名	富川 悟・福島正和・八木勝枝
編集機関	（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地　　TEL（019）638-9001
発行年月日	西暦2022年３月11日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
大谷地Ⅲ遺跡	岩手県 花巻市 諏訪・ 大谷地 地内	03205	ME35-1229	39度 22分 13秒	141度 5分 39秒	2021.09.16 ～ 2021.09.30	105㎡	都市計画道路山の神諏訪線道路整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大谷地Ⅲ遺跡	集落	奈良時代	溝　　１条	土師器坏、土師器甕、須恵器壺、縄文土器	

要約	（仮称）花巻ＰＡインターチェンジ整備事業調査区で検出した１号溝の延伸部分を調査した。

＊緯度・経度は世界測地系（2011）による数値である。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第735集

令和３年度発掘調査報告書

印　刷　令和４年３月４日
発　行　令和４年３月11日

編　集　（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電　話　(019)638－9001
FAX　(019)638－8563

発　行　（公財）岩手県文化振興事業団
〒020-0023　岩手県盛岡市内丸13番１号
電　話　(019)654－2235
FAX　(019)625－3595

印　刷　大更印刷株式会社
〒028-7111　岩手県八幡平市大更21－16－９
電　話　(0195)76－2514

©（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2022